≪2022 年 4 月（通算 306 回）公開サロン報告≫

＊＊＊

ユースリーグのこれからを考える①

「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクトを中心に

中塚義実、土谷享、、佐藤いちろう、嶋野雅春、ほか DUO クラブの皆さん

＊＊＊

【日　時】2022 年 4 月 19 日（火）19：30～21：30（終了後はオンライン懇親会）
【会　場】オンライン（Zoom）
【テーマ】ユースリーグのこれからを考える①
　　－「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクトを中心に
【演　者】中塚義実（NPO サロン 2002 理事長／筑波大学附属高校）
　　土谷　享（アートユニット KOSUGE1-16）、佐藤いちろう（靴郎堂本店）
　　嶋野雅春（DUO リーグチェアマン／城西高校）ほか DUO クラブの皆さん
【共　催】DUO リーグ
【参加者（サロン 2002 ファミリー）15 名】★は NPO 会員
★天羽礼（筑波大学附属高等学校）、安藤裕一（GMSS ヒューマンラボ／医師）、大河原誠二（桐一族／筑波大附サッカー部 OB）、★春日大樹（NPO サロン 2002 理事／筑波大学蹴球部 OB）、★岸卓巨（NPO サロン 2002 理事／FC 西巣鴨 03）、小松俊介（筑波大学附属高校）、佐藤いちろう（靴郎堂本店）、★嶋﨑雅規（NPO サロン 2002 理事／国際武道大学）、橘和徳（富山県立富山中部高校）、★茅野英一（NPO サロン 2002 監事／元帝京大学）、張寿山、★土谷享（アートユニット KOSUGE1-16）、★中塚義実（筑波大学附属高校／NPO サロン 2002 理事長）、本郷由希（会社員）、★本多克己（NPO サロン 2002 副理事長／㈱シックス）
【参加者（サロン 2002 ファミリー以外）18 名】
荒川浩幸（(一社)北海道フットサル連盟専務理事）、石原克哉（淑徳巣鴨高校）、井上豪　（郁文館高校）、井上敬義（京華商業高校）、牛山優（桐生第一高校）、内田裕之（自由学園）、倉口大（都立向丘高校）、小曽根潮（立命館宇治中高）、塩田憲一（豊南高校）、嶋野雅春（城西高校）、
杉本晃浩（貞静学園）、田中大翔（都立足立新田高校）、都丸恒介（本郷高校）、永井直樹（昭和第一高校）、橋本博（立教池袋高校）、早川幸治（豊島学院高等学校サッカー部顧問教諭）、速水高志（筑波大学附属高校）、平山黎（東洋大京北）
【報告書作成者】　守屋俊秀　ほか

【目次】
はじめに
Ⅰ．DUO リーグの理念とあゆみ
Ⅱ．DUO リーグのトロフィーがない！プロジェクト
Ⅲ．DUO リーグのこれから
おわりに

【キーワード】
DUO リーグ、ユースリーグ、高校サッカー、U-18、部活動改革、靴型トロフィー、スポーツとアート、遊び心、中塚義実、土谷享、佐藤いちろう

はじめに

中塚：皆さんこんばんは。NPO 法人サロン 2002 主催の公開サロンにようこそお越しくださいました。このサロンは 1997 年からほぼ毎月やっており、今日で通算第 306 回です。事前にご案内のとおり、今日はユースサッカー「DUO リーグ」との共同開催です。テーマは「ユースリーグのこれからを考える」。その第一弾として「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクトを中心に取り上げ、前半は私が主に話をします。後半は嶋野さんの進行で、DUO クラブの方にもお話いただく予定です。

まずは登壇者の紹介から。参加者の皆さんはチャット欄にお名前とご所属をお書きください。どのような方が参加されているのかを、皆さんも知りたいと思います。匿名の人が集まりコソコソ何かやっている会ではありません。ただし最終的に今日の内容はホームページで公開しますので、ホームページ（HP）に出されたら困る人は、その旨チャット欄にお書きいただければと思います。

申し遅れました、私は中塚義実と申します。筑波大学附属高校の教員を、60 の定年後の今年も引き続きやっております。サロン 2002 の理事長で、DUO リーグの初代チェアマンです。今日は主に進行と話題提供をさせていただきます。

DUO リーグのトロフィーについて、土谷さん、佐藤いちろうさん、口を開けていただけますか。

土谷：こんばんは。土谷です。今日は高知県の自宅にいます。美術家の活動をしています。KOSUGE1-16 というアーティスト名で活動しています。今日はよろしくお願いします。

佐藤：佐藤いちろうです。靴郎堂本店という作家名で、靴をテーマに作家活動をしております。拠点は東京・浅草です。会社員をやりながら靴を作る、そういった活動をやっております。よろしくお願いします。

中塚：では嶋野雅春さん。今年度から DUO リーグの三代目チェアマンに就任されました。今日の後半は嶋野さんに進めていただくことになります。

嶋野：よろしくお願いします。多くの DUO リーグ関係者に参加して頂いております。今日はおそらく中塚先生がメインだと思いますが、いろんな方のお話を伺えればと思っております。よろしくお願いします。

【無料・オンライン】ユースリーグのこれからを考える①　－
「DUOリーグのトロフィーがない！」プロジェクトを中心に

2022年4月19日（火） 19:30～21:30 （その後オンライン懇親会）
中塚義実（NPOサロン2002理事長／筑波大学附属高校）
土谷　享（アートユニットKOSUGE1 -16）、佐藤いちろう（靴郎堂本店）
嶋野　雅春 （DUOリーグチェアマン／城西高校）、ほかDUOクラブの皆さん

中塚：それではスライドを共有しながら中身に入って行きたいと思います。「DUO リーグのトロフィーがない！」プロジェクトですが、どのようなトロフィーかというと、こういうものです。結構でかいです。

最初に運営面からのお願いです。途中から来られた方もいらっしゃるかもしれませんが、繰り返します。主催者の方で録画しておりますが映像を公開することはありません。ご安心ください。個々

の記録行為は固くお断り致します。本日の内容は主催者が報告書にまとめ、最終的にはサロン 2002 の HP で公開します。ここでは自由なディスカッションができますが、HP での公開にはなじまない部分があるかもしれません。報告書にまとめる段階で、発言者には事前チェックをいたします。HP 上に名前を出したくない方はチャット機能でお知らせください。出せる方は、公開できる範囲でご記入ください。画面上の表記も、氏名と所属がわかるようにお願いします。

まずは趣旨説明と参加者紹介、そして私の方から、本日の共催団体でもある DUO リーグについて簡単にご説明します。いまでこそユース年代のサッカーリーグは当たり前になってますが、その端緒となったのが DUO リーグです。プライベートリーグは全国各地にいろいろありましたが、理念とともに、公的な場でアピールし、いまのムーブメントにつなげていったのは DUO リーグです。その理念と歩みの約 25 年を 15 分にまとめて要点だけ確認します。それについての質疑と意見交換を経て「トロフィーがないプロジェクト」に入ります。質疑と意見交換ののち、20 時 45 分ぐらいから「DUO リーグのこれから」ということで、嶋野チェアマンの進行で意見交換していければと思います。

Ⅰ．DUO リーグの理念とあゆみ

１．創設の背景－日本的スポーツ観の見直し

中塚：U-18 フットサルはもちろん、いまではバスケットボールでも、ユース年代のリーグ戦がお馴染みになってきました。その出発点は我々の DUO リーグにあります。

なぜこのリーグが始まったのか、どういう背景があったのかについてご存じない方が多いかもしれません。大事なところなのでざっと振り返っておきます。実は大きな流れが背景にあります。

日本のスポーツはこれまで、学校を中心に展開してきました。そこではチーム単位、選手ー「選ばれた人」ですね。すると多くの補欠が生まれます。競技志向、大会中心、短期間でチャンピオンを決めるトーナメント。最後の大会が終わると引退。単一種目を年中実施、「する」のみ。単一価値観に集約、学校、企業…。こういった考え方から、これからは、右側のキーワードにあるような考えが当たり前になっていくスポーツ環境をつくっていかなあかんということがあり、理念にまとめました。もちろん最初からこんなに整理されていたわけではありません。もう 25～6 年も前のことです。日本的なスポーツ観が 100 年間、学校の中で育まれてきたとするなら、次の 100 年は「これから」の考え方で作っていこうというのがベースにありました。

日本的スポーツ観：これまでとこれから

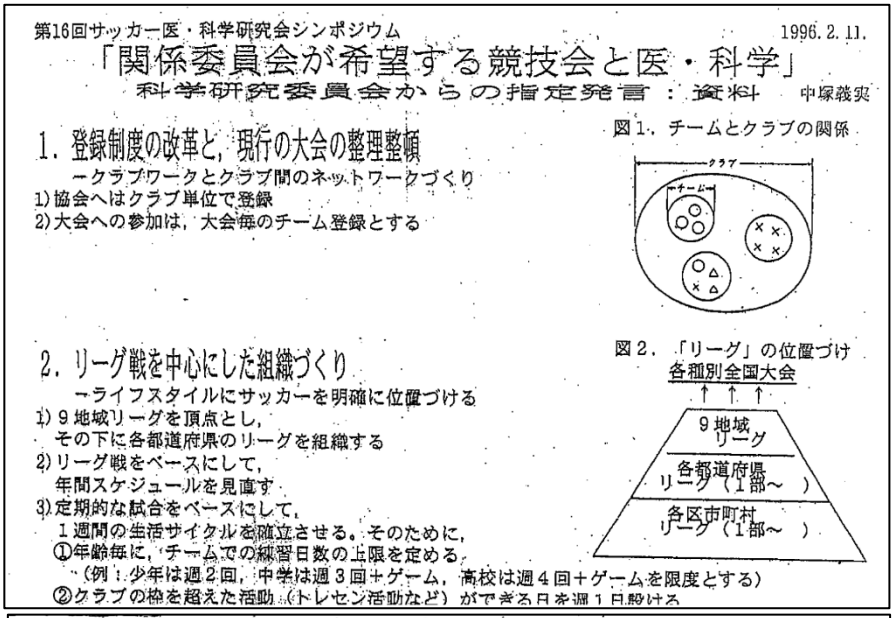
＜これまで＞		＜これから＞
チーム	→	クラブ
選手	→	プレイヤー
多くの補欠	→	補欠ゼロ
競技志向	→	プレイ・スポーツ・競技
大会中心	→	日常生活中心
トーナメント	→	リーグ
引退あり	→	引退なしの生涯スポーツライフ
単一種目年中実施	→	複数種目シーズン制
「する」	→	「する」「みる」「語る」「ささえる」
単一価値観に集約	→	多様な価値観を認める
学校・企業	→	地域

徐々に進む日本的スポーツ観／スポーツ環境の見直し

DUOリーグの理念
－文化としてのサッカーのあり方－

1．「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
サッカーの生活化
2．「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成
チームからクラブへ
3．強いチームとたくましい個の育成
レベルアップ
4．サッカーをささえる人材の育成
自主運営と受益者負担

1996 年の 2 月 11 日。その頃サッカー医・科学研究会が、日本サッカー協会（JFA）主催で行われていました。「関係委員会が希望する競技会と医・科学」というシンポジウムがあり、私は科学研究委員会の一員として 10 分間の発言の機会を頂きました。そこでこれまで考えていたことを整理して資料を配り、話させていただきました。これがスタートです。


第16回サッカー医・科学研究会シンポジウム　1996. 2. 11.

「関係委員会が希望する競技会と医・科学」
科学研究委員会からの指定発言：資料　中塚義実

1. 登録制度の改革と，現行の大会の整理整頓
－クラブワークとクラブ間のネットワークづくり
1) 協会へはクラブ単位で登録
2) 大会への参加は，大会毎のチーム登録とする

図1．チームとクラブの関係

2. リーグ戦を中心にした組織づくり
－ライフスタイルにサッカーを明確に位置づける
1) 9 地域リーグを頂点とし，
その下に各都道府県のリーグを組織する
2) リーグ戦をベースにして，
年間スケジュールを見直す
3) 定期的な試合をベースにして，
1 週間の生活サイクルを確立させる。そのために，
①年齢毎に，チームでの練習日数の上限を定める
（例：少年は週 2 回，中学は週 3 回＋ゲーム，高校は週 4 回＋ゲームを限度とする）
②クラブの枠を超えた活動（トレセン活動など）ができる日を週 1 日設ける

図2．「リーグ」の位置づけ

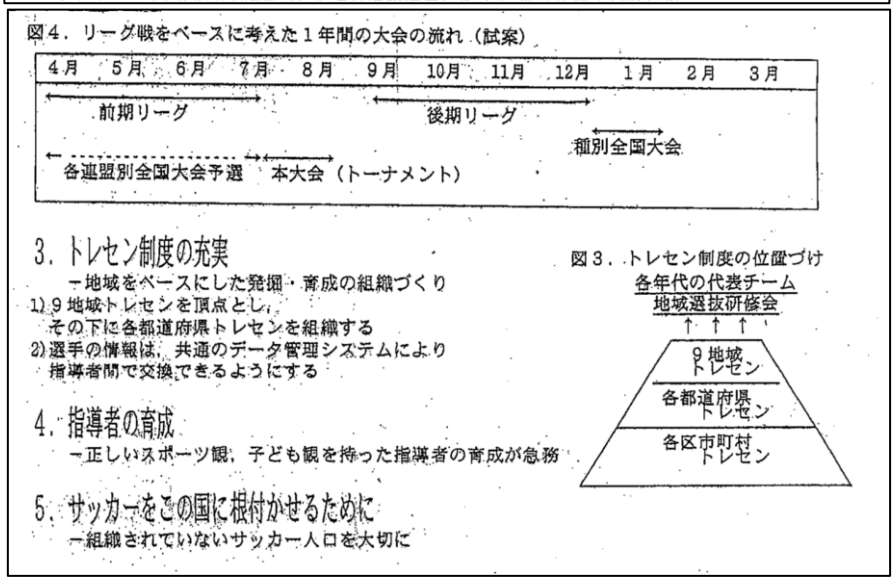


図4．リーグ戦をベースに考えた 1 年間の大会の流れ（試案）

3. トレセン制度の充実
－地域をベースにした発掘・育成の組織づくり
1) 9 地域トレセンを頂点とし，
その下に各都道府県トレセンを組織する
2) 選手の情報は，共通のデータ管理システムにより
指導者間で交換できるようにする

図3．トレセン制度の位置づけ

4. 指導者の育成
－正しいスポーツ観，子ども観を持った指導者の育成が急務

5. サッカーをこの国に根付かせるために
－組織されていないサッカー人口を大切に

資料をみればおわかりのように、リーグ戦の整備が最初にあったのではなく、まずはクラブをしっかり育てようということがありました。そのためのリーグ戦です。リーグ戦をベースに 1 年間のスケジュールを組み立てます。リーグ期間がシーズンになるわけです。前期・後期リーグの合間に各連盟のカップ戦があるような仕組みを考えていこうということです。これが 96 年 2 月で、3 月の時点で理念を掲げ、東京都文京区、豊島区の高校サッカー部と三菱養和、クラブユースに声をかけ、4 月から始めました。

創設 6 クラブは、都立小石川、都立向丘、筑波大附属、京華、昭和一、三菱養和です。（2）というのは 1 クラブから 2 チーム出したということで、10 チームの 1 リーグ制でした。理念も方向性もわかった人たちで小さく立ち上げました。10 チームのリーグ戦なので、1 節は 5 試合です。グラウンドが 1 日確保できれば 1 節消化できます。各学校の行事や大会日程などをみて、4 月から 7 月までの日程を抜き出して引き算したところ、9 節なら無理なくできる。夏休み前に充分可能だということがわかり、スタートしました。

２．リーグ創設期－小さく立ち上げ大きく育てる

中塚：昭和一は、初年度前期は 3 チーム均等に分けました。筑波大附属は 1・2 年チームと 3 年生の 2 チームです。一番盛り上がったのは、クラブ内対決、ダービーマッチですね。そして高体連の大会にはナショナルチームを編成して出るのだと言っていました。初代優勝は京華高校。そのチームの中軸選手であった永井直樹さんがいま、昭和一で監督をされています。この構想を面白がる、遊び心ある大人たちが、face to face でああだこうだ言いながら作り上げたということです。

DUOリーグ通信

リーグ戦第１節記録　1996.4.9.

日時：１９９６（平成８）年４月７日（日）　天候：くもりのち晴れ
会場：筑波大学附属高校特設グラウンド（縦75m×横61m）

第１試合（10:00～：主審…中塚、線審…筑波）
小石川A ２－１（2-0, 0-1）向丘
得点者：小石川A…大塚、鶴木
向　丘…オウンゴール
第２試合（11:20～：主審…上野、線審…小石川）
筑波A ３－２（0-0, 3-2）昭和C
得点者：筑波A…田上、川口、上田（尋）
昭和C…榎本(2)
第３試合（12:40～：主審…青木、線審…昭和）
小石川B １－１（0-0, 1-1）三菱養和
得点者：小石川B…加藤
三菱養和…高沢
第４試合（14:00～：主審…野原、線審…養和）
昭和A ０－３（0-1, 0-2）京華
得点者：京華…出川(2)、柳沢
第５試合（15:20～：主審…小金丸、線審…京華）
昭和B ３－１（2-0, 1-1）筑波B
得点者：昭和B…上田、高田、秦
筑波B…大河原

＜順位（第１節終了時）＞

１．	京　華	勝ち点３	得失点差＋３	総得点３
２．	昭和B	勝ち点３	得失点差＋２	総得点３
３．	筑波A	勝ち点３	得失点差＋１	総得点３
４．	小石川A	勝ち点３	得失点差＋１	総得点２
５．	小石川B	勝ち点１	得失点差±０	総得点１
５．	三菱養和	勝ち点１	得失点差±０	総得点１
７．	昭和C	勝ち点０	得失点差－１	総得点２
８．	向　丘	勝ち点０	得失点差－１	総得点１
９．	筑波B	勝ち点０	得失点差－２	総得点１
10．	昭和A	勝ち点０	得失点差－３	総得点０

＜得点ランキング（第１節終了時）＞

１．	榎本（昭和C）	２点
１．	出川（京華）	２点
３．	大塚（小石川A）	１点
３．	鶴木（小石川A）	１点
３．	田上（筑波A）	１点
３．	川口（筑波A）	１点
３．	上田（尋）（筑波A）	１点
３．	加藤（小石川B）	１点
３．	高沢（三菱養和）	１点
３．	柳沢（京華）	１点
３．	上田（昭和B）	１点
３．	高田（昭和B）	１点
３．	秦（昭和B）	１点
３．	大河原（筑波B）	１点

第２節の予定

＜筑波会場＞（審判）

10:00	筑波A VS 向丘	（昭和）
11:20	筑波B VS 昭和A	（向丘）

＜小石川会場＞（審判）

13:00	小石川A VS 昭和C	（養和）
14:20	小石川B VS 昭和B	（京華）
15:40	京華 VS 三菱養和	（小石川）

注：最初の計画では第３節に予定されていた組み合わせですが，会場の都合でこのようにしました
終了後，今後の進め方，リーグの名称の検討を兼ねて，懇親会を巣鴨界隈にて実施したいと思いますがいかがでしょうか？

ＤＵＯリーグ第２節記録　1996.4.15.

日時：１９９６（平成８）年４月13日（土）　天候：晴れ
会場：筑波大学附属高校特設グラウンド（縦75m×横61m），小石川高校グラウンド

筑波会場：第１試合（10:00～：主審…青木、線審…昭和A）
筑波A ３－１（2-1, 1-0）向丘
得点者：筑波A…岡橋(2)、磯部
向　丘…中井
筑波会場：第２試合（11:20～：主審…関原、線審…向丘）
筑波B ０－２（0-0, 0-2）昭和A
得点者：昭和A…猪野(2)
小石川会場：第１試合（13:00～：主審…野原、線審…三菱養和）
小石川A １－２（1-1, 0-1）昭和C
得点者：小石川A…木村野
昭和C…長尾、榎本
小石川会場：第２試合（14:20～：主審…小金丸、線審…京華）
小石川B １－１（0-1, 1-0）昭和B
得点者：小石川B…朱
昭和B…岩崎
小石川会場：第３試合（15:40～：主審…上野、線審…小石川）
京　華 ３－２（1-0, 2-2）三菱養和
得点者：京　華…谷本、村松、柳沢
筑波B…竹中(2)

＜順位（第２節終了時）＞

１位．	京　華	勝ち点６	得失点差＋４	総得点６
２位．	筑波A	勝ち点６	得失点差＋３	総得点６
３位．	昭和B	勝ち点４	得失点差＋２	総得点４
４位．	昭和C	勝ち点３	得失点差±０	総得点４
５位．	小石川A	勝ち点３	得失点差±０	総得点３
６位．	昭和A	勝ち点３	得失点差－１	総得点２
７位．	小石川B	勝ち点２	得失点差±０	総得点２
８位．	三菱養和	勝ち点１	得失点差－１	総得点３
９位．	向　丘	勝ち点０	得失点差－３	総得点２
10位．	筑波B	勝ち点０	得失点差－４	総得点１

＜得点ランキング（第２節終了時）＞

１位．	榎本（昭和C）	３点
２位．	出川（京華）	２点
２位．	柳沢（京華）	２点
２位．	岡橋（筑波A）	２点
２位．	猪野（昭和A）	２点
２位．	竹中（三菱養和）	２点
３位．	１得点者18名	

注）１得点者18名は以下のとおり
谷本・村松（京華），上田(尋)・田上・川口・磯部（筑波A），上田・高田・秦（昭和B），長尾（昭和C），大塚・鶴木・木村野（小石川A），加藤・朱（小石川B），高沢（三菱養和），中井（向丘），大河原（筑波B）

＜リーグ戦情報＞
１．本リーグの名称を検討していた指導者委員会(?)が，第２節終了後，巣鴨駅前某店内で行われ，「ＤＵＯ(ﾃﾞｭｵ)リーグ」に決定しました。
２．同委員会に出席されていたｻｯｶｰｼｮｯﾌﾟ加茂の平華氏より，本リーグのスポンサーに個人的に就任される希望があり，全会一致で承認されました。優勝チーム及び得点王には豪華賞品(?)が提供される可能性があります
３．第３節の予定は後日連絡いたします。連休中に行う可能性も検討しておりますので，ご意見がありましたらご連絡下さい（文責：中塚）

大事なのは、情報を共有することです。4 月 7 日の DUO リーグ開幕戦。筑波大附グラウンドで 5 試合行いました。DUO リーグ通信第 1 号は 4 月 9 日に、試合結果と第 1 節終了時の順位、得点ランキングなど、シンプルな記録を掲載し、FAX で 6 クラブに送りました。

この時点ではリーグ戦の名前がありません。通信の左下の欄を見ると、「リーグの名称の検討を兼ねて、懇親会を巣鴨界隈にて実施したいと思いますが、いかがでしょうか」とあります。そこでリーグの名前が DUO リーグになりました。翌週からは「DUO リーグ通信」となっています。これも下の方に書いてますが、「本リーグの名称を検討していた指導委員会(?)が、巣鴨界隈の某店内で行われ〜」、要は飲み屋なんですけど、そこに集まり、東京都高体連の第 2 地区を中心にやっているのだから「2」をかっこよく言ってみたら、ということで DUO になりました。

こんな感じで初年度の前期リーグをやったところ、非常に面白いということで、9 月からの後期リーグには学習院、豊南、文京区中学選抜が入れてくれと言ってきました。来るもの拒まず。ただし理念に賛同することが条件だと。ただ試合ができるからここに来るというのはダメ。試合をするだけじゃないんだよということを強く言い続けました。

この時点でいろんな工夫はしています。筑波大附属と京華は、このころ毎週木曜日に合同練習をやっていたので、両校のサブが合同チームをつくって出場します。また、1996 年夏のアトランタオリンピックで、サッカーではオーバーエージが 3 名まで認められるようになったので DUO でも採用してみました。これにより私も出場できるようになりました。また、こういった事業を末永く続けるにはささえる活動を評価すること、そのためには大会参加費が必要だということで、後期から 1 チーム

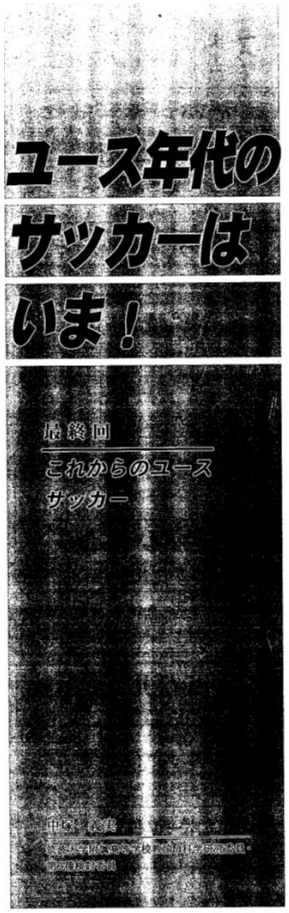
15,000 円を徴収し、審判手当などに充てることにしました。いまに続く体制がこの頃から少しずつ整い始めています。

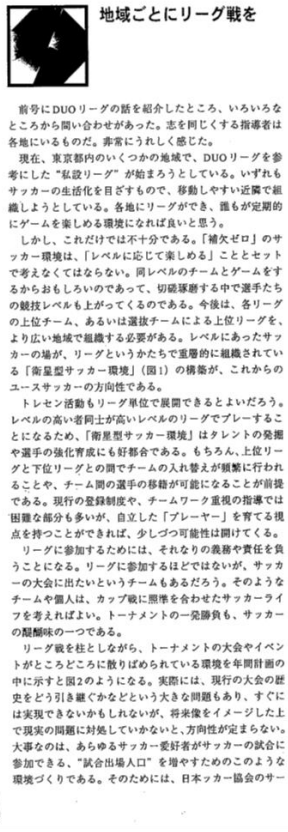
良い活動は自然と広がります。しかし大事なのは、理念を共有することです。小さく立ち上げ、大きく育てることです。

３．ユースリーグの理念の定着－“メッセージ”をいかに共有するか

中塚：私はこのころ、東京都高体連サッカー研究会も主宰しており、そこで「2 地区でリーグ戦を始めた」ことを紹介しました。すると 6 地区あたりで SM リーグ、世田谷と町田だったと思いますが、筑波大附属駒場にいた小沢さんや成城学園の蔵森さんらを中心にリーグ戦ができました。青梅線沿線でも始まり、少しずつプライベートリーグの輪が広がっていきました。

1997 年から JFA の機関誌 JFAnews で「ユース年代のサッカーはいま」という連載を持つ機会を得て、当時スポーツ社会学の講師をしていた JFA の指導者養成講習会でも紹介し、ユースサッカーリーグのムーブメントは徐々に大きくなってきました。東京都で公認化へ向けて本格的に準備を開始したのは 2000 年からです。JFA では川淵三郎キャプテンの時期にユースリーグ構造が一気に進みました。





地域ごとにリーグ戦を

前号にDUOリーグの話を紹介したところ、いろいろなところから問い合わせがあった。志を同じくする指導者は各地にいるものだ。非常にうれしく感じた。

現在、東京都内のいくつかの地域で、DUOリーグを参考にした“私設リーグ”が始まろうとしている。いずれもサッカーの生活化を目ざすもので、移動しやすい近隣で組織しようとしている。各地にリーグができ、誰もが定期的にゲームを楽しめる環境になれば良いと思う。

しかし、これだけでは不十分である。「補欠ゼロ」のサッカー環境は、「レベルに応じて楽しめる」こととセットで考えなくてはならない。同レベルのチームとゲームをするからおもしろいのであって、切磋琢磨する中で選手たちの競技レベルも上がってくるのである。今後は、各リーグの上位チーム、あるいは選抜チームによる上位リーグを、より広い地域で組織する必要がある。レベルにあったサッカーの場が、リーグというかたちで重層的に組織されている「衛星型サッカー環境」（図1）の構築が、これからのユースサッカーの方向性である。

トレセン活動もリーグ単位で展開できるとよいだろう。レベルの高い者同士が高いレベルのリーグでプレーすることになるため、「衛星型サッカー環境」はタレントの発掘や選手の強化育成にも好都合である。もちろん、上位リーグと下位リーグとの間でチームの入れ替えが頻繁に行われることや、チーム間の選手の移籍が可能になることが前提である。現行の登録制度や、チームワーク重視の指導では困難な部分も多いが、自立した「プレーヤー」を育てる視点を持つことができれば、少しづつ可能性は開けてくる。

リーグに参加するためには、それなりの義務や責任を負うことになる。リーグに参加するほどではないが、サッカーの大会に出たいというチームもあるだろう。そのようなチームや個人は、カップ戦に照準を合わせたサッカーライフを考えればよい。トーナメントの一発勝負も、サッカーの醍醐味の一つである。

リーグ戦を柱としながら、トーナメントの大会やイベントがところどころに散りばめられている環境を年間計画の中に示すと図2のようになる。実際には、現行の大会の歴史をどう引き継ぐかなどという大きな問題もあり、すぐには実現できないかもしれないが、将来像をイメージした上で現実の問題に対処していかないと、方向性が定まらない。大事なのは、あらゆるサッカー愛好者がサッカーの試合に参加できる、“試合出場人口”を増やすためのこのような環境づくりである。そのためには、日本ッカー協会のサー

ビスなどをただ端に“待つ”のではなく、地域でできることからはじめてみることである。

図1　衛星型サッカー環境試案

・定期的に試合ができる「リーグ戦」を地域ごとに行う。
・レベルに応じて階層的にリーグがある「惑星型サッカー環境」。
・選手の移動やチームの移動を柔軟に考える。
・一つのリーグは日常的なサッカー活動の単位であり、かつタレント発掘の単位でもある。
・地域にあったやり方で、無理なく行うことが大切。

図2　イベントシステムの例（ユース年代）

・リーグ戦とカップ戦を整理する。
・リーグ未加盟のチームにもカップ戦の醍醐味を。
・リーグ戦システムによって、「スポーツシーズン」の概念が生まれる。

スポーツのシーズン制と複数種目に関わるスポーツライフ

リーグシステムの導入によって、シーズンが明確になる。

ユース年代にとってどのようなシーズンが望ましいのかはさまざまな意見があろうが、シーズンオフもないまま年中同じようにサッカーだけやっているのはどうかと思う。サッカーのシーズンをリーグ戦を柱に編成し、サッカー以外の種目も含めた「スポーツのシーズン制」を考えることが大切である。

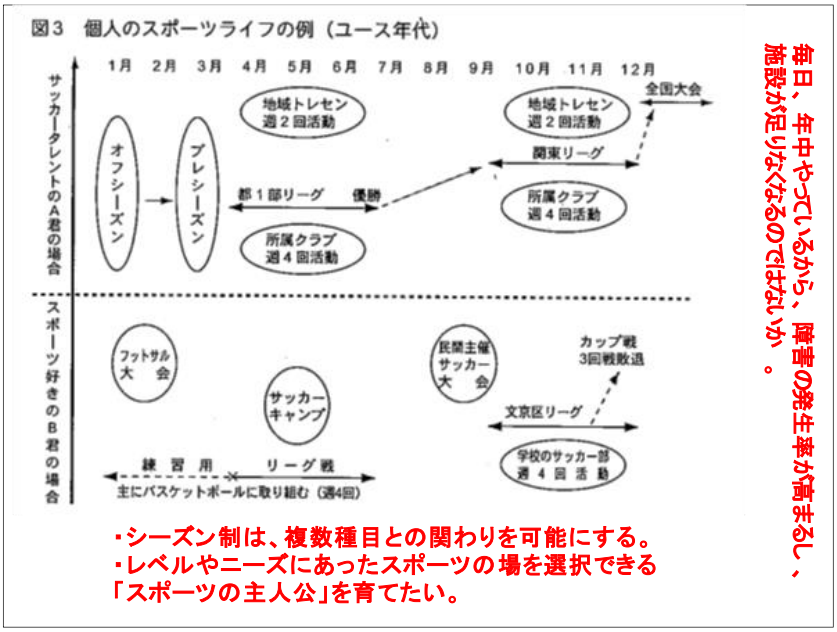
一人の高校生のスポーツへのかかわり方も多様であって

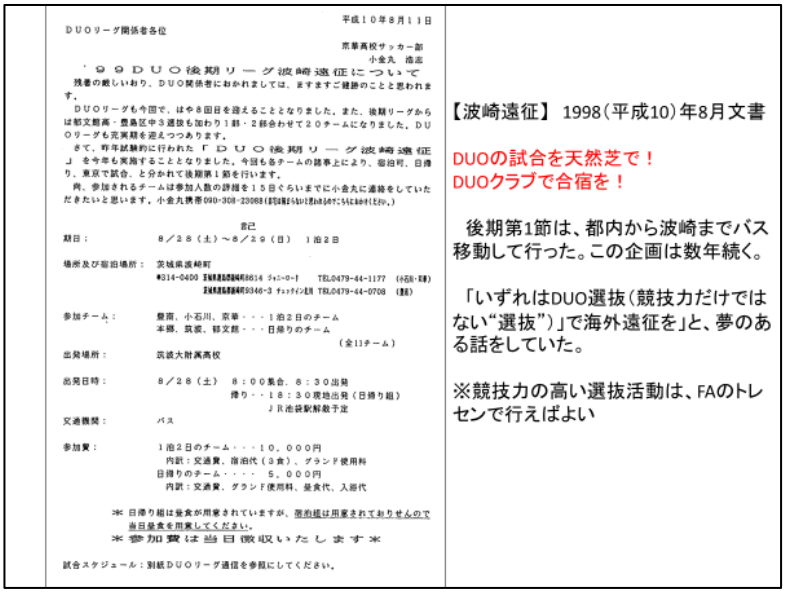
JFA NEWS No.165

1998年3月3

これは JFAnews の連載の最終回の記事です。「地域ごとにリーグ戦を」ということで、底辺は近場で、強いところは広い範囲を移動するようなリーグ構造を「衛星型サッカー環境」という表現で示しました。そして、イベントシステムの例を挙げ、リーグ期間がシーズンとなり、合間にカップ戦があるようなイベントの配置が考えられることを示しました。

そして、ここから先が大事なのですが、残念ながらいまもできていないことがあります。サッカーだけでなく、他のスポーツでも同じようにリーグシステムを導入してシーズンを明確にしようという考え方です。リーグシステムでシーズンが明確になれば、複数種目との関わりが可能になります。サッカータレントの A 君は、年間を通してサッカーリーグに関わり、サッカーライフを楽しめばいい。サッカーもやりたい、バスケもやりたい B 君は、例えば、春のリーグはバスケットボールに関わり、秋はサッカーに関わる。こういうことをすれば、いろんなスポーツが盛んになる。こういう構想を当初から持っており、JFAnews でも紹介しましたが、なかなかここまで行かないですね。逆に、サッカーのリーグが整えば整うほど、リーグの中で完結してしまい、ほかの種目に人が移動できないようになってしまっていることを危惧しています。





平成１０年８月１１日

ＤＵＯリーグ関係者各位

京華高校サッカー部
小金丸　浩志

’９９ＤＵＯ後期リーグ波崎遠征について

残暑の厳しいおり、ＤＵＯ関係者におかれましては、ますますご健勝のことと思われます。

ＤＵＯリーグも今回で、はやき回目を迎えることとなりました。また、後期リーグからは都文館高・豊島区中３選抜も加わり１部・２部合わせて２０チームになりました。ＤＵＯリーグも充実期を迎えつつあります。

さて、昨年試験的に行われた「ＤＵＯ後期リーグ波崎遠征」を今年も実施することとなりました。今回も各チームの諸事上により、宿泊町、日帰り、東京で試合、と分かれて後期第１節を行います。

尚、参加されるチームは参加人数の詳細を１５日ぐらいまでに小金丸に連絡をしていただきたいと思います。小金丸携帯090-308-23068(繋がらないときはおわかりになられてからもおわかりとおり。)

記

期日：　８／２８（土）～８／２９（日）　１泊２日

場所及び宿泊場所：　茨城県波崎町
〒314-0400 [illegible]8614 ﾌｪﾆｯｸｽ　TEL0479-44-1177　(小石川・豊島)
[illegible]9346-3 ﾁｪｯｸｲﾝ[illegible]　TEL0479-44-0708　(都文)

参加チーム：　豊南、小石川、京華・・・１泊２日のチーム
本郷、筑波、都文館・・・日帰りのチーム
（全11チーム）

出発場所：　筑波大附属高校

出発日時：　８／２８（土）　８：００集合、８：３０出発
帰り・・１８：３０現地出発（日帰り組）
ＪＲ池袋駅解散予定

交通機関：　バス

参加費：　１泊２日のチーム・・・１０，０００円
内訳：交通費、宿泊代（３食）、グランド使用料
日帰りのチーム・・・・　５，０００円
内訳：交通費、グランド使用料、昼食代、入浴代

※ 日帰り組は昼食が用意されていますが、宿泊組は用意されておりませんので当日昼食を用意してください。
※ 参加費は当日徴収いたします ※

試合スケジュール：別紙ＤＵＯリーグ通信を参照にしてください。

【波崎遠征】 1998（平成10）年8月文書

DUOの試合を天然芝で！
DUOクラブで合宿を！

後期第1節は、都内から波崎までバス移動して行った。この企画は数年続く。

「いずれはDUO選抜（競技力だけではない“選抜”）」で海外遠征を」と、夢のある話をしていた。

※競技力の高い選抜活動は、FAのトレセンで行えばよい

ほかにも面白いことをいろいろやっています。小金丸さんの名前で「’99DUO 後期リーグ波崎遠征について」という文書があります。参加できるクラブだけですが、バスをチャーターして都内から皆で移動し、後期第 1 節を波崎の天然芝でやろうという企画です。何年か続けました。バス内は複数クラブが同乗して「バスレク」です。「レクリエーション」でなく「バスレクチャー」ですが。「DUO リーグとは」といった話を他校の生徒に直接、少しだけですが話す機会となりました。

いずれは「DUO リーグ選抜で海外遠征を」という話も、半分冗談でしたが、半分本気でしていました。競技力の高い人たちの「選抜」はサッカー協会でやればいい。DUO リーグはもっと交流を大事にした「選抜」でいいじゃないかと考え、そんな話もしていました。

DUO リーグ通信は、頻繁に発行していました。先ほども言いましたが、情報を共有することはとても重要です。いまは HP で簡単に情報共有ができますが、ただ試合結果を共有するだけでなく、メッセージを共有することが大切です。

2000 年の DUO 通信からいくつかご紹介します。No.4 にある「東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書提出！」は、公認リーグ創設へ向けた動きが始まったことを紹介しています。「チェアマンからの厳重注意」では、「6 月 4 日の筑波会場では、体育館で女子バレーボールの練習試合が行われていました。DUO の試合を終えたある DUO リーガーが、バレーボールを見ようと正面玄関から体育館に入

りました。土足のままで…」。そしてバレー部の顧問の先生に怒られたという話です。右上の記事も同様です。校舎に向かってボールを蹴っていた DUO リーガーを中塚がこっぴどく叱った話を紹介し、施設を利用するとはどういうことなのかを「考えろ！」ということを高校生向けに発信したつもりです。ただ、こういったメッセージがどれぐらい、顧問経由で高校生に届いていたのかわかりません。

2000.6.6.(中塚)

2000ＤＵＯリーグ通信　No.6

大会、試験、そして悪天候のため、しばらく試合が消化できませんでした。試合の連絡は「ではない通信」で行っていると思いますが、DUO リーグ通信は久しぶりです。

１部は小石川勢の好調が目立ちます。このまま小石川Ａが３期連続の優勝を勝ち取るのか。6月 11 日の小石川Ａvs 三菱養和戦に注目です。

２部の方はいよいよ大詰め。UO リーグでは豊島学院Ａが全勝で１位を確定し、後期からの１部リーグへの昇格を決めました。おめでとうございます。UO リーグ２位が確定した豊南は、DU リーグ２位のチームとの、２部３位決定戦にまわります。その DU リーグですが、京華Ａがリードしていますが、6月 11 日の筑波大附 vs 城西Ａの試合で全て決まります。２部の大きな山場です。

ところで、DUO リーグプログラムは届いたでしょうか。選手諸君は特に、「読み物」のところを是非読んで下さい。そして、「DUO リーガー」としての誇りと自覚を持って楽しんで下さい。

FAX を受信されたらすぐ、中塚携帯 090-1423-9269 まで TEL して下さい

東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書提出！

「2001 年度より東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」ことが本年度の DUO リーグの活動方針です。そのため、プログラムの作成を始めとする DUO リーグそのものの整備を進めると同時に、政策決定機関でありかつ実施主体ともなる(であろう)(財)東京都サッカー協会(TFA)へのはたらきかけも必要です。

(財)日本サッカー協会(JFA)第２種検討委員長でもある小石川高校の上野二三一先生が、この件で TFA 安田一男会長に設立趣意書(DUO 関係者には後日お送りします)を提出したのが 6 月 5 日(月)。8 日(木)の総務委員会での検討を経て 20 日(火)の理事会で承認されれば、TFA 第２種委員会においてユースサッカーリーグを検討する部署が設置され、具体化へ踏み出すことになるでしょう。なお、参考資料として DUO リーグプログラムを 30 部、TFA に寄贈しました。

DUO リーグの皆様はこの成り行きを「当事者」として見つめていただくとともに、DUO リーグが先行事例としてよいモデルとなるよう、さらに質を高め、些細なことにも改善に取り組んで下さい。特に、次に挙げるようなことについては各クラブ、そして個々が充分自覚して臨んで下さい。

チェアマンからの厳重注意！

DUO リーグの理念とその活動を今後も継続し、広げていくためには多くの方の理解が必要です。特に施設の利用に関して、学校関係者の理解は不可欠です。「立入禁止」「ボール使用禁止」「スパイク禁止」「更衣・トイレは指定された場所を使用する」「ゴミは持ち帰る」など、各会場ごとの約束事を守らないと、DUO リーグそのものの運営ができなくなります。

6 月 4 日の筑波会場では、体育館で女子バレーボールの練習試合が行われていました。DUO の試合を終えたある「DUO リーガー」が、バレーボールを見ようと正面玄関から体育館内に入りました。土足のままで…。5 月にも同じことがありました…。体育館の管理をされている先生からは、「これはもう個人の問題じゃないよ。こんなんじゃあサッカーで学校を使って欲しくないよ！」とまで言われています。

体育館に入る場合、入り口で靴を履きかえる。子供でも知っている常識です。にもかかわらず、土足で上がってしまった行為は、もはや一個人が叱られ、反省して終わるという性質のものではありません。「DUO リーガー」が行った行為は DUO リーグ全体の問題です。もっというなら、ただでさえマナーが悪いと思われているサッカー界全体の問題です。同じ日の同じ会場で、更衣場所となっている校舎で遊びながら校舎に向かってボールを蹴っていた「DUO リーガー」が中塚にこっぴどく叱られたのも同じ理由です。

いま一度、施設を利用するとはどういうことなのか、一人ひとりがよく考えて下さい。学校だからどうこう言うのではありません。公営・民営問わず、施設を借りる場合に「使い方を守る」のは常識です。できない人(人たち)がいるようでしたら、その人(その人たち)を排除するか、もしくは活動そのものを中止するしかありません。サッカー界がその程度だとしたら、全く情けない話です。

そんなことにならないよう、DUO リーガーとしての自覚を持って行動して下さい。行動できない人がいた場合は互いに注意しあって下さい。他のクラブでもかまいません。同じ DUO の仲間なのです。「管理する人とされる人」という次元の低い構造に寄りかかることなく、一人ひとりが「DUO リーグの当事者」として行動して下さい。

試合結果

☆5月14日(日)＜小石川高Ｇ＞
２DU①節　城西Ａ　３－０(2-0,1-0)　郁文館Ｂ(9:30～主審…平嶋:小石川３年)
得点者：城西Ａ…後藤、山田、石原
１部①節　小石川Ａ　３－０(2-0,1-0)　郁文館Ａ(10:45～主審…石黒:城西３年)
得点者：小石川Ａ…中野(智)、藤原(智)、北村

☆6月4日(日)＜筑波大附属高Ｇ＞
２UO⑥節　豊島学院Ａ　２－０(2-0,0-0)　向　丘(9:00～主審…小澤:城西コーチ)
得点者：豊島学院Ａ…宮嶋、関
２DU③節　城西Ａ　３－０(2-0,1-0)　豊島学院Ｂ(10:30～主審…池端:向丘３年)
得点者：城西Ａ…飯島、高橋(潤)、岩田
１部③節　昭和一Ａ　２－１(1-1,1-0)　郁文館Ａ(12:45～主審…石黒:城西３年)
得点者：昭和一Ａ…木橋、平島
郁文館Ａ…坂倉
２DU③節　京華Ａ　２－０(1-0,1-0)　昭和一Ｂ(14:15～主審…小嶋:郁文館 OB)
得点者：京華Ａ…山本、須永
２UO⑥節　豊　南　２－１(1-0,1-1)　京華Ｂ(15:30～主審…堀:学習院コーチ)
得点者：豊　南…清水、鈴木(隆)
京華Ｂ…高安(ジャガ)(PK)
１部②節　三菱養和　２－２(0-2,2-0)　学習院Ａ(16:45～主審…小林:豊南教諭)
得点者：三菱養和…長谷川、岡部
学習院Ａ…上野(2)

☆6月4日(日)＜本郷高Ｇ＞
１部②節　小石川Ｃ　２－１(2-1,0-0)　本郷Ａ(14:00～主審…上田:小石川 OB)
得点者：小石川Ｃ…馬場(2)
本郷Ａ…石田
１部②節　小石川Ａ　５－０(2-0,3-0)　本郷Ｂ(15:30～主審…岩野:本郷 OB)
得点者：小石川Ａ…藤原(忠)、中野、渡辺、佐島、佐久間

注)5 月 13 日(土)の筑波会場２試合、5 月 28 日(日)の筑波会場５試合、京華会場１試合は、いずれも悪天候のため延期となりました

顧問そのものに「しっかりせい！」とメッセージを伝えることもしょっちゅうでした。2000 年度 No.17 の「チェアマンよりープロ意識を持ったボランティアたれ」は、いろんなところで言っていることです。皆本業があるわけです。本業はしっかりやらなあかん。そのうえで、面白いから、好きだからサッカーをやっている、リーグ戦をやっている。やるならちゃんとやろうや、ということです。

DUO リーグのプログラムの原稿がいつになっても揃わないという話です。「ええ加減にせえよ」ということを書いたわけですが、このようなメッセージを、通信を通していつも出し続けていました。

そのうち「DUO リーグ通信ではない通信」という意味で「ではない通信」が、当時城西高校に勤めておられた小澤亮二さんが自主的に発行してくれるようになりました。その最終号が残っています。小澤さんが三重県に転勤することになり、一旦終わっちゃいますよという内容です。「ではない通信」からもいろんなメッセージが発信されていました。

DUO 通信をボランティアの人たちにまとめてもらっていた時期もありました。いろんな人が原稿を書いており、昭和一の永井直樹さんが「ちょっといい話」を寄稿しています。小野伸二が筑波大附の体育館でフットサルをやるから「一緒にやれへんか？」とチェアマンから声がかかったという話です。ちょっとした遊び、遊び心、こういうのが満載だったリーグだったし、こういうことが実はものすごく大事なんだと思います。池袋のリゾート＆スポーツ専門学校の学生たちの「DUO 新聞」もあります。定期的に発行してくれました。いろんな人たちにささえられ、みなで遊んでいたわけです。

平成 12 年度後期(通算第 10 回)DUO リーグ通信

2000.10.18.(中塚)

2000ＤＵＯリーグ通信　No.17(後期第７号)

先週末はドタバタしました。「通信」「ではない通信」で連絡した試合のうちいくつかは実施できないことがFAX送信後判明し、急遽電話連絡で組み合わせを変更せざるを得ない状況に陥りました。

なぜそういうことになるのでしょう？

これに関するチェアマンからのメッセージがありますので、各クラブ代表者はしっかりお読み下さい。「スポーツをささえる」とはどういうことかに関する良いテーマです。すべてのＤＵＯリーガーもこれを読んでしっかり考えて下さい。各クラブへの宿題もあります。よろしくお願いします。

ところで、またもや朗報です。Ｊユース選手権予選を兼ねた関東ユースサッカーリーグ第２次リーグに出場していた三菱養和がレイソル青梅に１－０で勝って2次リーグを突破し、準決勝に進出しました。11月3日の準決勝の相手は横河ＳＣ。勝てば、決勝の相手はフォルトナ前橋対ヴィヴァイオ船橋の勝者です。あと２勝でＪユース選手権です。がんばれ！

FAX を受信されたらすぐ、中塚携帯 090-1423-9289 まで TEL して下さい

チェアマンより－「プロ意識を持ったボランティア」たれ！

ＤＵＯリーグの試合日程は、各期はじめに各クラブ代表者から提出される日程表をもとにして競技担当が編成し、広報担当が通信等で連絡することになっています。先週末のゲームは「通信」で連絡した後、試合前日になって実施できない試合があることが判明し、急遽電話連絡で訂正することとなりました。各期はじめに各クラブの代表者から提出された日程表をもとにして作成しているはずなのに、なぜそういうことになるのでしょう？

もう一つ。後期リーグ戦プログラムが、後期リーグも半分を経過した今ごろになってようやく印刷屋に入稿されました。８月から準備していたはずなのに、なぜこのような事態に陥るのでしょう？

ＤＵＯリーグを運営するために、競技･広報の他に会計担当を置き、登録費･参加費の徴収と配分(審判手当ての支給等)を行っています。プログラム、審判講習会、フレッシュマンリーグ、ＤＵＯリーグ選抜についても担当を決め、進めていくことになっています。このように業務を分担することはリーグの発展にともなう必然的な運営形態であり、各担当が責任を持って取り組むことで、リーグは一つのシステムとして機能するのです。

各担当は皆、他に本業を持っており、「ボランティア」としてこれらの仕事に取り組んでいます。本業を全うしながら「ささえる」仕事に取り組んでいる人がいることをまずはご理解下さい。

その上で、「ささえる」人々に敢えて苦言を呈します。

本業が「忙しい」ことを理由にするのは無責任な「甘チュア」の戯言です。「ボランティア」だからこそ、仕事は手分けして協力して行い、与えられた仕事には責任を持って、「プロ意識」を持って取り組まねばなりません。そうでなければ、ボランティアベースの活動が続くはずがありません。「忙しい」のは誰でも同じです。それを「忙しい」と取らず、「充実している」と前向きに考え、「プロ意識を持ったボランティア」として気持ちよく取り組んで下さい。必ず「ささえる喜び」が得られるはずです。

さらに、担当者以外のクラブ代表者に苦言を呈します。皆でＤＵＯリーグをささえているのだということを今一度ご確認下さい。原稿の提出が遅れたらプログラムは作れません。各クラブの日程表が中途半端なものだったらＤＵＯの日程は作れません。参加費が振り込まれなければ、運営できません。まだ過去の参加費を滞納しているクラブがあります…。

過ぎたことの非を問うのはやめましょう。それよりも、今一度、全員がリーグ運営の当事者としての意識をもって、後期リーグ後半戦に臨んでいただきたいと思います。

平成 12 年度後期(通算第 10 回)DUO リーグ通信

ＤＵＯクラブ代表者は、10 月最終週以降の予定(試合実施の可否／会場使用の可否)と、プログラム希望部数(登録選手数＋営業用配布部数＋各クラブごとの販売部数)を、10 月 21 日(土)の午後 4 時までに、中塚まで文書で、必ずご提出ください(書式自由)。

10 月 22 日(日)は、ＤＵＯリーグの試合は予定しておりません。

10 月 29 日(日)は、13:30 以降、学習院会場が使用できます。雨で流れた試合を中心に、互いに連絡をとって消化してください。試合が組めましたら会場校だけでなく、中塚へもご連絡下さい。

試合結果

☆10月14日(土)＜筑波大附Ｇ＞

２DU⑥節　豊島学院Ｂ　３－１(2-0,1-1)　豊南Ｂ(13:15～主審…金谷：筑波２年)
得点者：豊島学院Ｂ…鈴木(博)、鈴木(大)
豊南Ｂ　…オウンゴール

２UO①節　筑波大附　０－０(0-0,0-0)　学習院Ｂ(14:30～主審…鈴木：豊南３年)

☆10月15日(日)＜小石川高Ｇ＞

１部④節　小石川Ａ　３－３(1-1,2-2)　昭和一Ａ(14:00～主審…奈蔵：豊島学院教諭)
得点者：小石川Ａ…外園、中野、得田
昭和一Ａ…横山(2)、新井

１部④節　豊島学院Ａ　２－１(0-0,2-1)　小石川Ｃ(15:30～主審…大村：昭和一２年)
得点者：豊島学院Ａ…生嶋、桜井
小石川Ｃ　…船間

順位(10 月 18 日現在)

＜１部リーグ＞

	チーム名	勝　敗	勝点	得点	失点	得失差	残試合
1位	豊島学院Ａ	3勝1分1敗	10	9	6	3	2
2位	三菱養和	3勝	9	18	3	15	4
3位	本郷Ａ	2勝	6	8	1	7	5
4位	京華Ａ	1勝1分1敗	4	6	7	-1	4
5位	小石川Ｃ	1勝　1敗	3	3	3	0	5
6位	本郷Ｂ	2敗	0	2	5	-3	5
7位	小石川Ａ	1分2敗	1	4	9	-5	4
8位	昭和一Ａ	1分3敗	1	6	22	-16	3

＜２部DUリーグ＞

	チーム名	勝　敗	勝点	得点	失点	得失差	残試合
1位	学習院Ａ	3勝1分	10	22	1	21	3
2位	向　丘	3勝1分	10	14	4	10	3
3位	豊島学院Ｂ	3勝　2敗	9	6	10	-4	2
4位	城西Ａ	2勝2分	8	11	4	7	3
5位	文京中選抜	2勝　3敗	6	8	20	-12	2
6位	豊南Ｂ	1分3敗	1	4	10	-6	3
7位	郁文館Ｂ	1分2敗	1	2	13	-11	4
8位	昭和一Ｂ	3敗	0	3	8	-5	4

(通算第 18 号)

2001.4.16

『2001 前期 DUO リーグ通信』ではない《第３号》

『ではない』通信　第一章完結のお知らせ

DUO リーグ関係者 各位

誠に突然のことでありますが、この『ではない』通信は、2001 年度前期第３号（通算第１８号）を以って、第一章を完結致します。

この『ではない』通信を担当してまいりました私、小澤 亮二は、この度、三重県上野市下神戸（しもかんべ）にあります、「日生学園第一高等学校」に赴任が決まり、この地を離れることになりました。極めて珍しい“年度始めの中途採用”ということで、『ではない』通信本拠地である埼玉県三郷市を今月の１８日に出て、１９日にはあちらでの勤務を開始致します。そのため、皆様へのご挨拶ができない形となり、このような形式をとらせて頂きました。ご無礼をお許し下さい。また、今後の引継ぎについても“事後”となってしまうため、チェアマンとも相談をし上記の内容になりました。

皆様もご承知の通り、私は母校でもある城西大学附属城西高等学校と契約をし、サッカー部監督として平成８年度よりクラブを指導して参りました。平成１０年度からは、東京都高体連、また、この『DUO リーグ』にも参加させて頂く中、サッカーにおける仕事として本当に順風満帆の日々を送って参りました。しかし、たった１つだけ私の“夢”を実現することが出来ませんでした。それは、“教員”になること。城西高校でも、もう数年も前から「教員としては採用できない」と言われており、毎年、この“夢”をかなえようと全国各地、採用試験の情報が入れば受験していた次第です。

そして、３０歳目前の今月１３日。採用内定の連絡を受け、これを承諾致しました。城西高校での指導が５年にもわたり、正直なところ、心寂しくまた心苦しい気持ちもありますが、赴任先での「サッカー部顧問」としての活動もあり、気持ちの整理をし、三重県で頑張りたいと思います。皆様には、今後の私とのお付き合いだけではなく、城西高校に対しても熱くご指導、ご鞭撻を頂けますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

沢山の経験、思い出、述べたいことは山ほどありますが、何をどう表現してよいのやら正直なところ分かりませんが、皆様と共にこの東京の地で過ごした日々は私の大切な“宝物”としてあちらに持っていきたいと思います。あちらでの生活が落ち着きましたら、近況などをお伝え致します。本当にありがとうございました。

最後に、これは『ではない通信』として発送致しますが、公式文書としてご理解ください。『ではない』通信が DUO リーグ関係者各位に引き継がれることを期待し、筆をおきます。長い間、この『ではない』通信のご愛読ありがとうございました。

P.S.
当分のご連絡は、携帯電話かメールにてお願い致します。

以上

（文責：広報担当　小澤　亮二）

【ではない通信】2001 年4月16日

DUOリーグ通信「ではない」通信は、当時城西高校に勤めていた小澤亮二氏が自主的に発行していた。

2001 年度末で「ではない」通信第1章完結。
小澤氏は三重県へ。

平成15年11月30日（日）

DUOリーグ通信

◎「されどサッカー」を満喫！

[illegible]新人選手権は、24日に[illegible]地区のカップ[illegible]となりました。[illegible]は、1月から[illegible]を目指します（2004年度からはこの[illegible]はなくなります）。[illegible]
新人戦ということでどのチームにも[illegible]があり、[illegible]（[illegible]すると10試合中5試合）もあったPK戦の多さに[illegible]サッカーの[illegible]さと恐ろしさを[illegible]させてくれます。[illegible]
リーグ戦は[illegible]と進行しています。1部は大混戦ですね。[illegible]です。「2部から上位2チームが[illegible]」という[illegible]厳しいリーグです。あと約1ヶ月ですべてが決まります。12[illegible]

試合結果（1部リーグ）

11/3　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　3－1　[illegible]　得点＝[illegible]（[illegible]
11/9　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　4－3　[illegible]　得点＝[illegible]（[illegible]
11/9　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　2－1　[illegible]　得点＝[illegible]（[illegible]
11/9　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　1－0　[illegible]　得点＝[illegible]（[illegible]）
11/9　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　2－1　[illegible]
得点＝[illegible]（[illegible]）[illegible]（[illegible]）
11/23　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　2－1　[illegible]
得点＝[illegible]（[illegible]・[illegible]）[illegible]（[illegible]）
11/23　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　3－2　[illegible]
得点＝[illegible]（[illegible]・[illegible]・[illegible]）[illegible]
11/24　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　2－1　[illegible]
得点＝[illegible]（[illegible]・[illegible]）[illegible]（[illegible]）
11/24　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　4－2　[illegible]
得点＝[illegible]（[illegible]・[illegible]・[illegible]・[illegible]）[illegible]
11/30　（[illegible]G－[illegible]）[illegible]　6－0　[illegible]
得点＝[illegible]（[illegible]・[illegible]・[illegible]）

	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	※	1-3	-	2-4	1-2	-	2-3	1-2	1-1
[illegible]	2-1	※	2-1	-	2-0	1-5	3-4	2-0	0-2
[illegible]	-	1-2	※	1-4	1-0	1-4	2-5	4-3	1-3
[illegible]	4-2	-	4-1	※	-	-	6-3	1-4	0-1
[illegible]	2-1	0-2	0-1	-	※	1-2	3-3	7-1	2-1
[illegible]	-	5-1	4-1	-	2-1	※	-	0-0	5-0
[illegible]	3-2	4-3	5-2	3-6	3-3	-	※	3-2	3-2
[illegible]	2-1	0-2	3-4	4-1	1-7	0-6	2-3	※	1-0
[illegible]	1-1	2-0	3-1	1-0	1-2	0-5	2-3	0-1	※
[illegible]	2-0	3-0	2-1	1-2	1-1	3-1	2-1	-	-

ちょっといい話　昭和第一高等学校サッカー部コーチ　永井 直樹

11月14日（金）、この日は私にとって一生心に残る体験をした日でした。そのことを少し書いてみようと思います。

DUOリーグ後期も終盤にさしかかっていますが、各チームとも両等でリーグ戦が日程的に思うように進まず、必死になって対戦相手チームの先生に連絡を取ったり、グランドの確保のために、役員の先生に密なる連絡を取ったりして、何とか試合が出来るように奔走されている時期かと思います。

私も同様に、14日の日、何処か空いているグランドはないものか、施設やグランドのある高校の先生方に連絡をしていました。筑波大学附属高校の中塚先生に連絡を取りました。運良くグランドが空いている日があるという話を聞き、『この日を絶対逃すか！！』という気持ちで対戦相手チームの先生にも電話で何度もやりとりしました。とはいうものの、一日が始まると、授業や部活、その他いろいろで連絡も取れなくなり、夕方になってようやく中塚先生と最終確認の話が出来たという状態でした。

その最終確認が終わると、中塚先生はいつものあの気楽な調子の関西弁で、「これから、夜、予定空いてる？　ちょっと、フットサルでもやらへん？」とおっしゃるではありませんか。私も『お！！久しぶりにやろっかなー（＾¥＾）』。そして、次に中塚先生の口から出てきた言葉にびっくり。「実はなー、フットサルやりに、……小野伸二が来るんやけど。けーへんかー？」私は「・・・！？行きマース！！」と即答。中塚先生が「I文館高校のI先生には連絡してもええかもなー」と言い残し、私は学校を後にした。筑波大学附属高校に向かうタクシーの中で居ても立ってもいられない気持ちをなんとか抑えようとしながら、『I先生に掛けてみよう』と思い、電話するも「こちらは留守番電話サービス……」。こんな機会はもう二度とないと思ったので再度の電話。が、残念無念。『あーぁ残念もったいないなー』、I先生勝負弱い……（笑）と思いながら筑波大学附属高校に到着。ほぼ同時にK華高校のK金丸先生も到着されていましたが、既にやる気満々の格好でした。

何故、小野選手がフットサルに筑波大学附属高校に来るのかというと、小野選手の代理人をされている方（正確には「マネジメントをしている人」代理人は資格を持っていないとできない —— 中塚注）が、何と中塚先生の教え子だった関係からだったのです。その会社のチーム、小野選手の友達のチーム、教員チームの3チームが参加の予定でした。体育館には筑波大学附属高校の生徒諸君が、体育館の片隅のコーンとコーンバーに囲まれた中（まるで檻に入れられた猿のように！？）小野選手の登場を、今か今かと高まる気持ちを抑えられないような面もちで待っていました。　（右のページにつづく）

（左のページからつづく）

そして、小野選手の登場！！　ニット帽をかぶり、黒のウインドブレーカーを着て（当然のことながらニット帽からシューズまで全てナイキだった）。ボール回しを一緒にしながら、気分はもう日本代表になって、つくづく『幸せだな』と思いながらの中、フットサルの試合は始まりました。

オープンゲームは、教員チーム対小野伸二チーム。教員チームの面々は『絶対に勝ってやる』と意気軒昂でした。私個人的には、小野選手を『本気にさせてやる！！』と思いながらゲームを行い、結果は1対1の引き分け。でも得点を奪うことが出来たのが、私にとっては小野選手から点を奪った（ただの勘違い！小野選手からはとっていない）ということで、いい気分で試合を終えることが出来ました。その後は、一緒のチームでプレーが出来たりして、私のサッカー人生の中で最高の時間を過ごすことが出来ました。

みなさ〜ん、チャンスは、いつどこからやって来るか分かりません。日頃の行いが良いからなのかもしれません（笑い）。常にアンテナを張って、日々の生活を悔いなく送って行きましょう。

【DUO新聞】
東京リゾート＆スポーツ専門学校の
学生が定期的に発行
平成15（2003）年12月号(12/5発行)

４．公認化をめぐって－学校教育の壁と“遊び心”の喪失

中塚：DUO リーグを整えていくのと同時に、公認化に向けての準備が始まりました。それは、

〇機会均等＝全てのメンバーに等しく参加の機会が与えられる

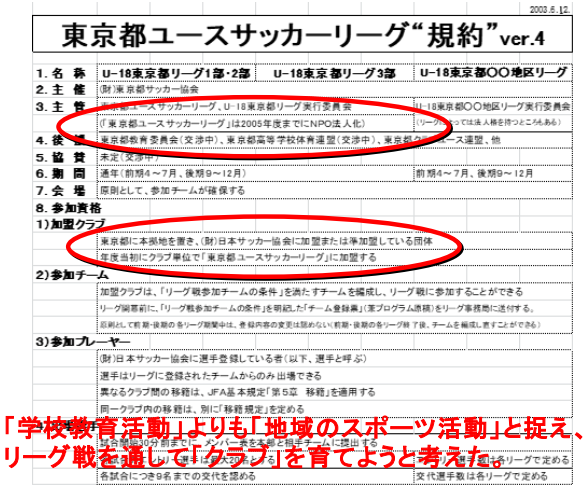
〇保護・優遇＝「お墨付き」がつくことによって活動が容易になる

これらを意図しての公認化です。2000 年度から本格的な準備が始まり、サッカー界の公認を得て、できれば教育界からの公認も得られればよいと考えていました。

そもそも当初考えていたのは、永続的なクラブを育てることです。リーグ戦を通して、チームだけでなくクラブを育てる発想です。はじめは学校運動部として関わることになるかもしれませんが、リーグの一員として責任を果たし、末永く続けていくには、「チーム」だけの学校運動部では無理です。卒業生のかかわりや保護者のサポートを含めた多世代型のクラブとして自立した組織をつくり、熱心な顧問がいなくなっても続けられるようにしていかないとダメです。このようなことを DUO クラブには言い続けてきたつもりですが、どこまで届いたでしょうか。

「東京都ユースサッカーリーグ“規約”Ver4」にはこうした思想が残っています。しかし 2004 年 2 月の総会で確定した要項では、「クラブ」ではなく「団体」という言葉が用いられ、学校運動部のまま加盟する妥協案となりました。都立高校が参加しやすいようにとの配慮です。

DUO 以外に広げたときに、理念やビジョンを抜きに公認化準備が進み、学校の部活のまま、クラブを育てないままリーグ戦の試合だけをこなす感覚になり、いま大変なことになっている…。そんな気がしています。

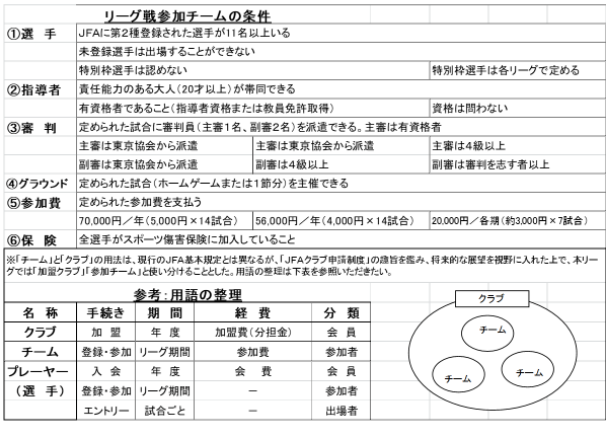


2003.6.12

東京都ユースサッカーリーグ“規約”ver.4

1. 名　称	U-18東京都リーグ1部・2部	U-18東京都リーグ3部	U-18東京都〇〇地区リーグ
2. 主　催	(財)東京都サッカー協会		
3. 管　理	東京都ユースサッカーリーグ、U-18東京都リーグ実行委員会		U-18東京都〇〇地区リーグ実行委員会
	(「東京都ユースサッカーリーグ」は2005年度までにNPO法人化)		(リーグによっては法人格を持つところもある)
4. 後　援	東京都教育委員会(交渉中)、東京都高等学校体育連盟(交渉中)、東京都ユースサッカー連盟、他		
5. 協　賛	未定(交渉中)		
6. 期　間	通年(前期4～7月、後期9～12月)		前期4～7月、後期9～12月
7. 会　場	原則として、参加チームが確保する		
8. 参加資格			
1)加盟クラブ			
	東京都に本拠地を置き、(財)日本サッカー協会に加盟または準加盟している団体		
	年度当初にクラブ単位で「東京都ユースサッカーリーグ」に加盟する		
2)参加チーム			
	加盟クラブは、「リーグ戦参加チームの条件」を満たすチームを編成し、リーグ戦に参加することができる		
	リーグ開幕前に、「リーグ戦参加チームの条件」を明記した「チーム登録票」(実プログラム添付)をリーグ事務局に送付する。		
	原則として前期・後期の各リーグ期間中は、登録内容の変更は認めない(前期・後期の各リーグ終了後、チームを編成し直すことができる)		
3)参加プレーヤー			
	(財)日本サッカー協会に選手登録している者(以下、選手と呼ぶ)		
	選手はリーグに登録されたチームからのみ出場できる		
	異なるクラブ間の移籍は、JFA基本規定「第5章　移籍」を適用する		
	同一クラブ内の移籍は、別に「移籍規定」を定める		
	試合開始30分前までに、メンバー表を本部と相手チームに提出する		
	選手は、[illegible]リーグで定める		
	各試合につき9名までの交代を認める		交代選手数は各リーグで定める

「学校教育活動」よりも「地域のスポーツ活動」と捉え、
リーグ戦を通して「クラブ」を育てようと考えた。



リーグ戦参加チームの条件

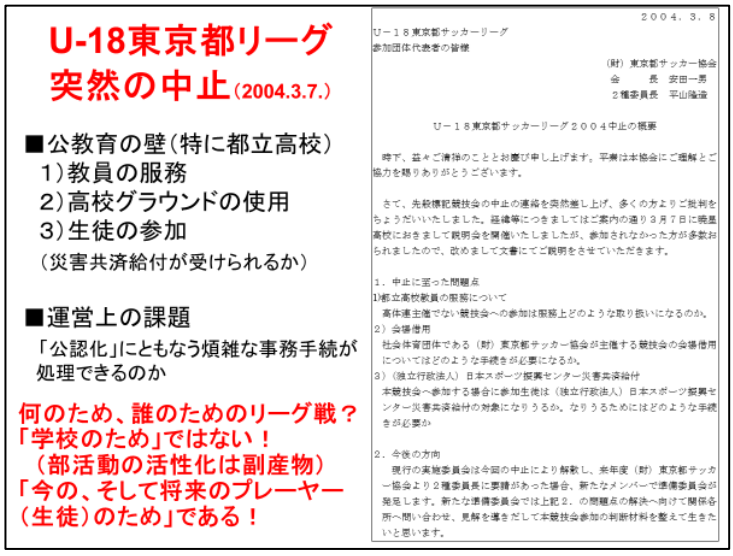
①選　手	JFAに第2種登録された選手が11名以上いる		
	未登録選手は出場することができない		
	特別枠選手は認めない		特別枠選手は各リーグで定める
②指導者	責任能力のある大人(20才以上)が帯同できる		
	有資格者であること(指導者資格または教員免許取得)		資格は問わない
③審　判	定められた試合に審判員(主審1名、副審2名)を派遣できる。主審は有資格者		
	主審は東京協会から派遣	主審は東京協会から派遣	主審は4級以上
	副審は東京協会から派遣	副審は4級以上	副審は審判を志す者以上
④グラウンド	定められた試合(ホームゲームまたは1節分)を主催できる		
⑤参加費	定められた参加費を支払う		
	70,000円／年(5,000円×14試合)	56,000円／年(4,000円×14試合)	20,000円／各期(約3,000円×7試合)
⑥保　険	全選手がスポーツ傷害保険に加入していること		

※「チーム」と「クラブ」の用法は、現行のJFA基本規定とは異なるが、「JFAクラブ申請制度」の趣旨を鑑み、将来的な展望を視野に入れた上で、本リーグでは「加盟クラブ」「参加チーム」と使い分けることとした。用語の整理は下表を参照いただきたい。

参考：用語の整理

名　称	手続き	期　間	経　費	分　類
クラブ	加　盟	年　度	加盟費(分担金)	会　員
チーム	登録・参加	リーグ期間	参加費	参加者
プレーヤー(選　手)	入　会	年　度	会　費	会　員
	登録・参加	リーグ期間	－	参加者
	エントリー	試合ごと	－	出場者

2004 年 2 月に「U-18 東京都リーグ」の設立総会を開いた後で、公教育の壁（特に都立高校）が問題点として指摘され、3 月 7 日に 2004 年度の公認リーグは中止となりました。教員の服務の問題、学校のグラウンドをサッカーばかりが使うのではないかとの懸念、生徒の過剰負担になるのではないかとの危惧が都立高校長からいくつか出たて中止になったことを、当時おられた方はご存知だろうと思います。



U-18東京都リーグ
突然の中止(2004.3.7.)

■公教育の壁(特に都立高校)
1)教員の服務
2)高校グラウンドの使用
3)生徒の参加
(災害共済給付が受けられるか)

■運営上の課題
「公認化」にともなう煩雑な事務手続が処理できるのか

何のため、誰のためのリーグ戦？
「学校のため」ではない！
（部活動の活性化は副産物）
「今の、そして将来のプレーヤー(生徒)のため」である！

２００４．３．８

Ｕ－１８東京都サッカーリーグ
参加団体代表者の皆様

（財）東京都サッカー協会
会　長　安田一男
２種委員長　平山隆雄

Ｕ－１８東京都サッカーリーグ２００４中止の概要

時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は本協会にご理解とご協力を賜りありがとうございます。

さて、先般標記競技会の中止の連絡を突然差し上げ、多くの方よりご批判をちょうだいいたしました。経緯等につきましてはご案内の通り３月７日に晩星高校におきまして説明会を開催いたしましたが、参加されなかった方が多数おられましたので、改めまして文書にてご説明をさせていただきます。

１．中止に至った問題点
1)都立高校教員の服務について
高体連主催でない競技会への参加は服務上どのような取り扱いになるのか。
2）会場借用
社会体育団体である（財）東京都サッカー協会が主催する競技会の会場借用についてはどのような手続きが必要になるか。
3）（独立行政法人）日本スポーツ振興センター災害共済給付
本競技会へ参加する場合に参加生徒は（独立行政法人）日本スポーツ振興センター災害共済給付の対象になりうるか。なりうるためにはどのような手続きが必要か

２．今後の方向
現行の実施委員会は今回の中止により解散し、来年度（財）東京都サッカー協会より２種委員長に要請があった場合、新たなメンバーで準備委員会が発足します。新たな準備委員会では上記２．の問題点の解決へ向けて関係各所へ問い合わせ、見解を導きだして本競技会参加の判断材料を整えて生きたいと思います。

繰り返しになりますが、学校のためにやっているのではありません。部活動の活性化はあくまでも副産物です。今の、そして将来のプレーヤーのためなのだということです。

その後…

■TFA公認「Tリーグ」発足（2005）

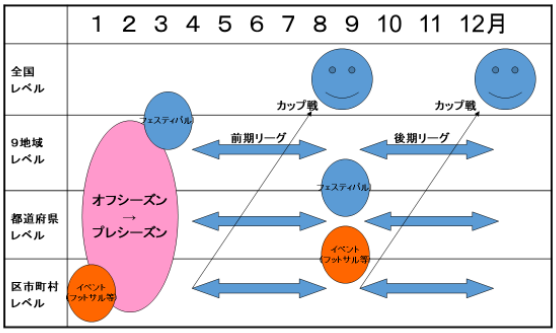
■JFA2種・3種リーグ改革プロジェクト（2006～2007）
「リーグ戦文化」を定着すべく、各地で見直しと新たな取り組み開始
→ 2009年には全都道府県で2種・3種年代のリーグ戦を実施

■「地区リーグ」は準公式戦として実施（2004～）

■「地区トップリーグU-18東京」創設（2008）
・都内8つの地区リーグの上位による全都リーグ（8チーム×2ブロック）
・2009年度より地区トップリーグとTリーグの昇降格（2011から完全実施）

■頂点の「高円宮杯JFAU-18サッカープレミアリーグ」から底辺にある「DUOリーグ」までつながる（2011）

リーグ戦を基盤としたユースサッカー構造
（私案）



その後公認リーグはできました。上のリーグから順番に。そして JFA でも 2 種・3 種リーグ改革プロジェクトが進み、私もメンバーの一人として、先駆的に取り組んでいた DUO リーグを紹介しながら全国に広げていくプロジェクトに関わりました。地区リーグ、地区リーグから上がっていった地区トップリーグ。ここでは玉生さんがすごく力を注いでくれました。そして頂点から底辺まで、2011 年度につながり、イメージとしては上図のようなのができあがったということです。

「DUO リーグのいま」と書いていますが、2007 年度時点でこのようになっていました。理念は徐々に実現されつつある。リーグ戦は当たり前。しかし学校教育としての限界がこの頃から、当然ですけどみえています。学校の先生だけでサッカーをささえるのは無理です。互いの顔が見えなくなりつつある。飲み会減、メール増。新旧メンバーに意識のズレ。オフィシャル化して行く中での功と罪が見え隠れしてきたなと感じます。「上に合わせよう」「きちんとやろう」の意識が強まり、「“遊び心（スポーツマインド）”が失われてきた」というのが、このころすごく感じていたことです。

DUOリーグのいま（2007年度時点で）

○“理念”は徐々に実現されつつある
→リーグ戦は「当たり前」（ただしクラブ間で温度差あり）
●学校教育としての限界が見えつつある
→学校の先生だけでサッカーをささえるのは「無理」
→卒業生や地域との連携が不可欠
●互いの顔が見えなくなりつつある
→飲み会減（メール増）／新旧メンバーに意識のずれ
○●“公認化”をめぐる功罪が見え隠れする
→JFAの方針によってリーグ環境は整備されたが、
「上に合わせよう」「きちんとやろう」の意識が強まり、
“遊び心（スポーツマインド）”が
失われてきた…

そんな時、「DUO リーグのトロフィーがない！」という間抜けなできごとが発生しました。
ということで、まずは第 1 部として、私の方からの話題提供でした。

＜ディスカッション①＞

中塚：ここで時間を区切って質疑応答、意見交換をいたします。どんな観点でもかまいません。思い出話でもかまいません。永井直樹さんはまだ来られていないですか？　車の中のような感じですね。

永井：すみません。ちょっと高体連の仕事を杉本先生とやっていて。車で帰りながら入ってます。

杉本：私も遅れて入らせていただきました。どうもありがとうございます。

中塚：直樹さんはいまでこそ昭和一の先生ですが、DUO リーガー1 期生として、始まった頃の思い出話などをお願いします。

永井：始まった頃は小金丸先生もいらして。僕が中 3 の時に京華高校に来られました。練習試合もいろいろ組んでくださって、試合がやれるのが嬉しくなり。それで高校 3 年生のとき DUO リーグができました。それで筑波でも試合がやれたし、三菱養和もいたし。何て言うんですか、結構やれたのがすごくうれしかった記憶があります。定期的に試合ができたのがよかったですね。

中塚：ありがとうございます。先ほど「ちょっといい話」というのを直樹さんが DUO 通信に書いてくれたことを紹介させてもらいましたが、覚えてます？　その時は Zoom に入室してなかったかな。
　同じころ、筑波大附でプレイしていた桐一族の大河原さんも入っておられます。大河原さんからもコメントいただければと思いますが。

大河原：当時の思い出というか、感触というか。最初は 10 チームで始まり、クラブ数でいうともっと少なく 6 クラブですね。運営も、関わったクラブと学校の先生、コーチたちで一所懸命やってくださっていたのを見ていました。小さく始まって一所懸命やっていた感じがあって、その数年後、あるいは 10 年後ぐらいにこんなに大きくなるとは思っていませんでした。高校生としてやっていたときは、このリーグがどこに向かっていくかという理念の部分を言葉では説明いただいてたし、頭には入っていましたけど、ちゃんと理解できてなかった部分はありました。とにかくまあ、永井先生と一緒で、サッカーができることをプレーヤーとしては楽しんでるような感じでした。

中塚：ありがとうございます。ちなみに私、今回資料をみていて発見したんですが、DUO リーグ第 1 節の記録、1996 年 4 月 7 日の日曜日、会場は筑波大附属高校特設グランド。この時、野球のバックネットが壊れていて、マウンドの手前のところにゴールラインを引いて、縦 75m、横 61m と変則的なピッチでやったんです。開幕戦は私が主審で小石川 vs 向丘が 2 対 1。そしてこの日の第 5 試合、昭和 Bvs 筑波 B の得点者が「大河原」となっています。これは大河原さんですね。

大河原：はい。私はたぶん 3 年間で数えるほどしか点を取ってないと思うんですけど…覚えてます。

中塚：ほかの方から、質問でも何でもいただければと思いますが。

橘　：富山県の橘です。質問お願いいたします。富山県もリーグ戦を高校生年代で始めたのが、おそらく 2003 年からです。私がちょうど高校生だったときで、全国でも早い方だったと聞きました。2004 年は高校 3 年生で、リーグ戦で県で優勝したんですが、アウォーズを開いてくださって、プレゼンターに田嶋幸三さんに来ていただいたのを覚えています。富山県はなぜか公立高校も私立高校も、割とスムーズにリーグ戦を始められたような印象を持っています。いまもどんどん積極的にリーグ戦に参加されているんですが、あの当時、富山県は春季大会をなくして、代わりにリーグ戦を導入するような形でスタートしたんじゃないかと記憶しています。東京都はそんな形ではなく、何か引っかかることがあって、都立高校の校長先生が参加を見合わせるような形だったんでしょうか。

中塚：オフィシャル化した時の話ですね。東京都はチーム数が多いので、一つ大会をやるにしてもものすごい試合数になるんです。ただし、たくさん試合をやっているのは勝ち上がっていく強いチームだけで。1 回戦で敗退し続けると公式戦は年 3 試合となるわけです。ただ、大会運営となるとどうしても学校のグラウンドが全部占有されてしまいます。なのでオフィシャル化した時に言われた「学校のグラウンドが全部サッカーで使われちゃうんじゃないか」というのは、そういったところをみてこられた校長先生が危惧されたのだと思います。それから、勝ち上がっていくところは試合数が増えていく。それに加えてリーグ戦。高校生が勉強する時間がなくなるじゃないかとなる。さらに言うと、学校の先生、とくに都立の先生がどういう身分で引率できるのか。高体連主催でもないのに…。そういうことを言われました。教育委員会の中の社会教育のほうで僕らは進めていくつもりでいたのですが、そうはなりませんでした。
富山とのつながりも実はありまして、カターレ富山の言いだしっぺの学校の先生がいますよね。

橘　：はい、佐伯先生ですね。

中塚：佐伯さんは大学の後輩で、実は何度も東京に来てくれましたし、私が富山に出向いたこともありました。月 1 回、東京都高体連サッカー科学研究会をやっていて、そこでリーグ戦の話などをやっていたところに富山からやってきて、東京がこんなことをやっているのかと。じゃあオレたちもやるぞっていうのでやりだしたんです。富山の方が東京よりも先に大々的にやりだしたのは、橘さんも言われたアウォーズです。市民会館かなにか、立派な施設を借りて、本格的にやっていたのを聞きました。すごいなあと話をしたのを覚えています。
　張さんから手が上がっていますね。

張　：質問です。DUO リーグという存在を全然知らなくて、今日お話しを聞いてすごくいいことをちゃんと前からやってたということを知りました。高校の時にこういうのがあったら楽しかっただろうなあと本当に思いました。やるのが大変だったというのも、話を聞いてよくわかりました。僕はイングランドのリーグ戦ができあがった経緯とか、そういうのを勉強したりして感じたことがあります。中塚先生がまとめられたトーナメントとリーグ戦の違い。いいとこ悪いとこみたいなところで考えられたと思いますけど、ホーム＆アウェイというのは、リーグ戦には必ずついています。オリジナルのイングランドの場合では、ホーム＆アウェイということと地域クラブ、地域スポーツの活性化はすごくつながっていると思います。教育大附属、筑波大附属も湘南高校と定期戦をやってますよね。あれがリーグ戦で毎週行われるというものがあると、日本の文化が本当の意味でヨーロッパ的なものに近づいていくと思うんです。だから、グラウンドがある所に 10 チームが集まって 5 試合やるのではなく、週末に 1 試合だけ。試合したあとはお互いにちゃんと交流する。こういうところも中塚先生はご存じだと思うんですけど、そこに入り込めなかった、あるいは入らなかったのはなぜですか。どのようにお考えだったのか聞かせていただければと思います。

中塚：施設の問題ですね。我々の DUO リーグは東京の文京区、豊島区で始めました。多くの学校が、都立も私立もめちゃくちゃグランドが狭いんです。とてもじゃないけどホーム＆アウェイはできない。逆に、うちなんかはフルサイズのピッチがとれるし、平日こそいろんな部活が、中高ともに使っていてフル稼働していますが、週末に使っているのはサッカー部だけだったりするわけです。一方で、都立向丘高校はグラウンドがない。毎週末どこで活動するかで、顧問の先生が毎週 20 件ぐらい電話をかけまくっているわけです。それだったら同じ文京区にある施設をお互い共有しようよ。そうい

う考えもありました。個々のクラブで解決できないのだから、リーグで解決していこうという発想です。のちに東京大学も加盟しますが、これも文京区の施設の活用という観点もありましたね。

張　：もうひと言だけ言わせていただくと、日本は競技をまず優先するという発想が、スポーツ関係者の間に強いのかなと思っています。グラウンドが小さかったら、小さいグラウンドでリーグ戦の試合をする。フットサルでもいい。そういう発想で、逆にリーグ戦のホーム＆アウェイを優先して、競技のルールを変えてしまうと発想もないかなと思います。女子サッカーの小学校レベルでできないかなと、いま温めているアイデアです。

中塚：ありがとうございます。おっしゃるとおりだと思います。のちの話になりますが、DUO リーグは前後期制をとっていましたが、後期、学校の 2 学期は、修学旅行などの行事はあるし大会もあるのでなかなか日程が取りにくい。そこで後期は昇降格をともなうリーグ戦はやらないで、むしろいま張さんがおっしゃったみたいに、各クラブが、それぞれのグラウンドに応じて招待フェスティバルみたいなワンデー大会をやろう。「フリーサイズフットボール」と呼んでいましたが、そういうことも導入しました。けどこれも、なかなか定着しません。“遊び心”が広がらないのが難点です。このあとの話につながってきますが。

張　：ちゃんとした試合をしたいということですね。そこですよね。

中塚：そうですね。いま話してくださった張さんはサロン 2002 のメンバーで、明治大学…。

張　：明治大学に籍があって、あと女子のなでしこリーグのスフィーダ世田谷というチームの副代表をやっています。あとおじいさんサッカーやっています。

中塚：ではこのあたりから中盤戦に入って行きたいと思います。途中から来られた方もおられると思いますが、自己紹介していただく時間が全然ありませんので、チャット欄の方にお名前と所属を書いていただけないでしょうか。どんな方が参加されているのか、皆で共有したいと思います。HP に名前や所属を載せるのは困るという方は、その旨お書きください。

Ⅱ．DUO リーグのトロフィーがない！プロジェクト

１．“遊び心”の回復にアートとの融合を

中塚：では「トロフィーがない！プロジェクト」のところからです。このあたりから佐藤いちろうさんや土谷享さんに話を振りながら進めていきたいと思います。

トロフィーはあったんです。優勝チームが持ち回りにしていたものがあったのですが、どこかで失ってしまいました。レプリカがあったから紛失に気づくのが遅れた。不自由を感じていなかったわけですね。これではいかん、何とかしなくては。先ほどもありましたが、“遊び心”を失っている状況もあり、アーティストの土谷さんに相談し、何とか打開していきたいなと考えました。2007 年 8 月ごろの話です。“遊び心（スポーツマインド）”の回復にアートとの融合を、ということです。

では土谷さん、出会いのあたりから「日本的アート観－これまでとこれから」を含め、ご説明いただけますか。

日本的アート観：これまでとこれから（by土谷）

＜これまで＞		＜これから＞
洋画家・日本画家・彫刻家	→	アーティスト
多くの「在庫」	→	「在庫ゼロ」のアートシステム
「結果」志向	→	「制作ﾌﾟﾛｾｽ」の多様なあり方
「展覧会」中心	→	「日常生活」中心
ﾎﾜｲﾄｷｭｰﾌﾞ（美術館・画廊等）	→	ｻｲﾄｽﾍﾟｼﾌｨｯｸ（現場）
単一種目の職人的な技量に特化	→	多様な表現方法を試みる
「発表」のみのｱｰﾄﾗｲﾌ	→	「する」「みる」「語る」「ささえる」
単一の価値観に集約	→	多様な価値観を認める
学校・企業・国	→	地域

土谷：これは確か 2003 年か 4 年頃のサロン 2002 の月例会で使った資料だと思います。中塚先生の「これまでのスポーツ観とこれからのスポーツ観」に呼応する形で、アートの方もそれになぞらえて作ってみました。

日本でアート、美術って言うと、洋画家とか日本画家、彫刻家というように、使う素材で分けられてしまいますが、実はそんなことありません。私も絵を描いたり彫刻をしたり、いろいろします。要するにこれからはアーティストでいいじゃないかと。それから、売れもしないのに、発表する機会もないのに、どんどん作って溜める。それが芸術家像だということではなくて、仮設物でもいいし、販売目的のアートピースを作る必要もないんです。そういったことで在庫ゼロのアートシステムもできるんじゃないか。結果指向だったり展覧会中心だったり、美術館とか画廊が中心だったり。そういったいわゆる美術教育とか、海外が培ってきたシステムを真似た、みんながステレオタイプに思う美術観、美術の考え方を改めて、制作プロセスの多様なあり方があってもいいんじゃないか。展覧会中心じゃなくて日常生活中心で。美術館や画廊に収まるものではなくて屋外とか現場に合わせた制作方法もあるだろうと。それから、スポーツと同じで単一種目ではなく、多様な表現方法を試みる。そして表現することだけがアートではない。要するに、岡本太郎のように芸術は爆発だという有名な言葉に象徴されていると思いますが、日本の美術教育は、それぞれの心の内側から表現しなさいみたいなことを評価されてしまうし、そういった美術観になぞらえてしまいますが、そういうことだけではなくて、見ることや表現したことを語ること、それから多様な表現をどうやってささえていくか。表現環境をどうやって作っていくか、みたいな部分も必要です。スポーツで言うところのクラブのようなあり方ですね。そして学校とか企業とか国ではなく、もっと地域という単位でのアートは可能なんじゃないかと。そういうことを中塚さんの資料に呼応して発表させてもらったというものです。

中塚：2003 年ぐらいだったですかね。

土谷：そうだと思います。

中塚：ひょんなところで土谷さんと出会って、土谷さんもサロンの一員としてアートとスポーツのコラボみたいなことを、その頃からちょっとずつやり始めていたんですよね。

土谷：そうですね。元 DUO リーガーで溶接工の中村敬さんという人がいましたね。

中塚：昭和一の OB ですね。

土谷：はい。中村さんに制作をいろいろ手伝ってもらう中で、DUO リーグというのがあって中塚先生っていう面白い考え方を持った人がいるんだよということで紹介いただいて。中村くんの工場の二階か何かでサロン 2002 の月例会が開催された時に、この資料で発表させてもらった記憶があります。

中塚：そんな関係があって土谷さんに相談しようということになり、土谷さんたちのアトリエへ出向きました。2007 年の 12 月だったと思います。まあなんだかよくわからないところでした。

土谷：この頃は東京の葛飾区小菅一丁目の 16 番地が拠点だったんですね。私のアーティスト名の KOSUGE1-16 というのはこの住所に由来しています。

中塚：ここにいろんなアーティストが、部屋をシェアしてアート活動を展開していた。そんな感じですかね。

土谷：はい。当時は 3 組から 4 組のアーティストと共同のスタジオを運営していました。

中塚：確か小金丸さんと玉生さん、岸さんとともに出向いたと思います。そしてこの日に、どんなトロフィーを作るかという具体的な話を、鍋をつつきながらやったんですよね。

土谷：はい、トヨタカップのテレビ中継があった日で、プロジェクターで試合を見ながら鍋をつついてブレストしました。初めは、うちのアトリエに陶芸の窯を持っている作家さんも交えてトロフィー制作の話をしようと準備してたんですけど、この日現れなかったんですね。友達の佐藤いちろう君にも声かけていたので、後にこのアトリエに佐藤さんも入ることになるんですけれども、はい。

中塚：では佐藤いちろうさん、登場のあたりから靴型のトロフィーに至るあたりを。

２．「履けなくなったサッカーシューズでできた“履ける”トロフィー」の発想

佐藤：僕は大分県出身です。サッカーをやりたかったんですが田舎だったので、サッカークラブ自体もなく、サッカーをやりたくてもできない環境でした。それで自分たちでやればいいやという考え方で。小学校 6 年生の時に、サッカー好きの先生がクラブを作ってくれたんですけど、僕はもう小学校 6 年生で卒業してて、中学校に行ってもサッカー部がなく、サッカーやりたくてもできません。学校って、今もそうですけど、部活に入らなければいけないルールがあったので、とりあえずバスケ部に入

ってサッカーやるかみたいになって。田舎なので、運動場には困りませんでした。端っこで球蹴ってたり。あと、畑に入ってサッカーやったりしてました。そういう話をこの時もしたと思います。

サッカーをしていく中で。中学校の時かな、スパイクが高くてなかなか買えなかったんですけど、何とか小遣いで買ったやつを長持ちさせるために、靴磨きしてました。いまは皮って少なくなったんですけど、僕が始めた頃は本当に真っ黒の皮で、カンガルー皮とか、高いけどまあなんとか長持ちさせることができます。そういう中で、これを作りたいという思いに駆られるようになりました。いま上京して靴職人という仕事に就いています、という話をそのときにしたんですね。鍋をつつきながら。そしたら「それはエエ！　部室にいっぱいスパイクが眠ってるやないか！」という中塚さんの言葉で、これを素材にできるんじゃないかという話になりましたね。

中塚：そうですね。鍋つついて酒飲みながら、なんかいきなり意気投合して。皆さんもおわかりだろうと思いますが、高校生はサッカーシューズを年 3 足ぐらい履きつぶして、それを部室にほったらかしにして。最終的には大掃除か何かのときに燃えないゴミになるわけですが、燃えないゴミの中には皮が残っているわけです。それ使えるんちゃうか、というような話だったと思います。2007 年の 12 月末、トヨタカップの決勝か何かをやってる時でした。そこからトントントンと話が進み、土谷さんの方で、やるんだったらロゴをしっかり作ろうという話になり、DUO リーグのロゴができました。さすがアーティストと思いましたね。

土谷：歯磨き感覚っていうことで。

中塚：そしてこういうカレンダーも作ったんですよね。

土谷：これはなくなってしまったことを緊急アピールするような形で。靴磨き講座に靴職人を連れて来ますよと。それから DUO リーグの年間スケジュール。この時は、間に合わなかったんで前期だけの日程を。予定が決まってないんでね。ただ書き込めるようなカレンダーがいいなということでつくりました。

中塚：これはすべての DUO リーガー、全部で 1,000 人ぐらいいますけど、全員に行き渡るように作りましたね。すべての DUO リーガーの自宅に、勉強部屋の机の前にこれが貼ってあると。何年間か作りましたね。

土谷：そうですね。3 回くらい作ったと思います。

佐藤：カレンダーの靴磨きの写真は、僕が高校の時履いてた靴を磨いてるところです。部活じゃないけど、勝手に、好きでやっていました。

土谷：このキャンペーンで 300 数十足分が集まってたんですよね。

３．2008 年度前期
ートロフィー制作とアウォーズ

中塚：そして 2008 年度シーズン前の春休み、場所は本郷高校の食堂ですかね。DUO リーガーや DUO クラブ指導者が集まって「第 1 回靴磨き講座」です。

土谷：食堂っていうのがちょっとどうなんですかね（笑）。今のコロナ禍だとこのシチュエーションは難しいなあ。

中塚：養和のコーチとか、指導者が何人かいますよね。土谷さんと佐藤さんが前に立って説明しています。靴の磨き方の講習会でしたっけ、最初は。

佐藤：そうです。磨き方ですね。

中塚：現全国高体連サッカー専門部長の玉生謙介さんもやってますね。右隣は岸卓巨さんですね。左は都立足立工業の顧問の先生です。高体連の委員かどうかは関係なく、何をするのかなあという感じで、面白がっていろんな人が来てくれました。

4 月に入り、2008 年度前期 DUO リーグが始まります。筑波大附の生徒たちがアウェイの試合に出向いている写真です。するとそこに靴郎堂本店が待ち構えているわけです。準備万端で。そして試合後に靴磨きをします。磨くだけでなく、磨いた皮を切り取る作業もあります。

佐藤：トロフィーを作っていきますから。どうやって形にしていくかについては土谷さんとブレストしながら、解体したパーツを使おうということになりました。だからまずは解体しなきゃ、みたいなところです。ただ、僕らだけが解体するのではなく、皆で作り上げるので、では磨いたのをその場でバラしちゃおうというところですね。

中塚：こういう活動をかなり高頻度でやってくれていましたよね。

佐藤：毎週末、試合会場に行ってました。

中塚：そうですね。この写真は、ユニフォームを見ると京華と都立豊島かな。ピッチの脇に靴郎堂本店が待機しています。そして試合後は両チームが仲良く、というか仲がいいかはわからんけど、一緒に靴磨きをやって切り取っているところです。

　そして新聞にも取り上げられました。2008 年 7 月 19 日土曜日の朝日新聞夕刊です。このあたり、つまり制作の最終段階について 2 人から紹介してもらえますか。

土谷：そうですね。全長 60cm の靴を左右作るっていうことで、いちろう君には相当負担をかけました。私は同じように、木型を作る担当だったんです。ブーツ型の本物の木型を作って、それに廃材で出た靴の皮をつなぎ合わせた。一枚の生地から靴を作り上げていくということです。その木型に、絞りながら、摺り込みっていう作業があるんですけど、それがものすごい力がいるんです。結局、この

日の朝ギリギリに、徹夜して持ち込んで行ったという感じですね。新聞記事の写真は、まだ仕上がってないんです。

佐藤：そうそう、仕上がってない。下の方はまだ寄せてるだけ。

土谷：ソールがついてないですね。

中塚：そうですね。

佐藤：しかもこの日、取材してくれた人がずっと、でき上るのを待ってくれていました。摺り込みして一体になるところをずっと見てくれていて。最後の記念撮影。たぶん死んでます、顔が。眠くて。

朝日新聞（夕刊）　2008年（平成20年）7月19日　土曜日　4版　12

街　メガロポリス　ひと　Megalopolis

お古のシューズ トロフィーに

都内の「補欠ゼロ」リーグ　表彰式でお披露目

選手参加型の優勝トロフィーを作ろう――。そんな発想から、東京都内の高校生を主体にしたサッカーリーグ「DUOリーグ」で、使い古しのサッカーシューズを再利用した靴形トロフィーが完成した。高校生も制作の一部を担い、若い芸術家が形にした。（峯俊一平）

DUOリーグは「補欠ゼロ」を掲げ、96年に設立された。部員数に応じて1校から何チームでも参加でき、春と秋にリーグ戦がある。文京、豊島、足立区の27クラブ、900人が参加している。

同リーグで約4年前、トロフィーがなくなった。筑波大付属高監督でリーグチェアマンの中塚義実さん(46)が昨夏、知人の現代美術家土谷享さん(31)に新トロフィーの制作を頼んだ。

高校生は年に2～3足のシューズをはきつぶす。リーグ幹部らと語り合うなかで、使い古したシューズを「宝の山」に変える靴形トロフィーのアイデアが浮かんだ。

土谷さんは、靴をテーマにした芸術家で、仲間の佐藤いちろうさん(29)と一緒に3月末から都内の試合会場に足を運び、選手たちに古いシューズを持ってきてもらった。計130人が参加し、布やブラシ、クリームで磨いたあと、カッターやはさみでパーツごとに切り取ってくれた。6月までに約300足分が集まったという。

葛飾区の町工場を改造したアトリエで制作。約50足分をミシンと手で縫い、長さ60㌢、高さ40㌢の「1足」を作り上げた。土谷さんは「グラウンドでの記憶を形にしたトロフィー」と話す。黒や赤、青、白など様々なシューズの甲皮が、ちりばめられている。

筑波大付属高3年の石黒哲雄さん(17)は「靴は一緒にプレーしていたもの。斬新なDUOリーグらしいトロフィーが出来た」と喜ぶ。

19日夕に都内である前期リーグの表彰式で、優勝チームに手渡される。

使い古したサッカーシューズから靴形のトロフィーを作った、佐藤いちろうさん（左）と土谷享さん＝東京都葛飾区小菅2丁目

中塚：そして DUO リーグアウォーズです。場所は駒込高校の視聴覚室で、土谷さんが説明してくれています。注目は司会者で、筑波大附属高校卒業生の保持（やすもち）さんです。電通に勤めておられた方で、月例サロンに参加して DUO リーグのトロフィーのことを知ってメチャクチャ面白がり、アウォーズの進行役を買って出てくれました。こんな感じで高校生が集まり、そしていよいよお披露目です。このトロフィーの大事なところは、「履けなくなったサッカーシューズでできた“履ける”トロフィー」ということで、優勝チーム、確か都立足立のキャプテンだと思うけど、トロフィーを履いています。もちろん持つこともできますね。

このプロジェクトの意義は、スポーツとアートの融合、リサイクル運動、生きる力、交流の場、なんといっても「“遊び心”を取り戻す試み」だったということです。

リーグが掲げる理念から、プロジェクト誕生のいきさつまで、ひとつながりの事業だったと言えるでしょう。

実はこのあと、いくつかの副産物があるんです。土谷さん、説明をお願いします。

４．副産物－サンダルとネットワーク

土谷：約 300 足の、廃棄寸前のシューズのアッパー部分は、晴れてトロフィーになっていったんですが、ソールの部分が同じ数だけ残った状態です。たいていはアッパーの方が先に傷んで穴が開いてしまうので、廃棄することになるんです。

佐藤：サッカーやってる人だったらわかると思いますが、グラウンドはだいたい土なので、蹴ったりすると、つま先から切れてしまいます。けどソールの方は結構傷んでないんですね。

土谷：そこで、ソールを使ったビーチサンダルを…。

佐藤：そうそう。土谷さんがいきなり持ってきて。サンダル、ええんやないかってところから、ちょっとやってみようとなって僕が試作品を作り、それをワークショップの売り物にまでできるように作ってみました。これが副産物ですね。

中塚：この写真は、金沢 21 世紀美術館で展示されていたもので、よく見ると 21,000 円の値札がついています。

佐藤：いまでこそ「アップサイクル」という言葉があるので理解しやすいかもしれませんけど、この当時はその言葉はなかったし、なんで高くなるのっていう感じ。なんでっていうより、「えっ?!」ていう方が大きかったですね。

中塚：このサンダルは何足か売れたんですよね。

佐藤・土谷：全部売れました！

土谷：そして何パーセントだったか、DUO リーグの会計に収めて、グラウンドのレンタル費用とかにあててもらうために還元させていただきました。

佐藤：ここのタグのところに SOLE SOUL と書いています。ブランドもちゃんと作りました。ソールの魂ということで SOLE SOUL。これがブランド名で、その下に DUO って書いてあるんです。DUO からもらった素材だということがわかります。

土谷：遠し番号が書いてあるよね。

佐藤：そう。通し番号が全部書いてある。写真のサンダルは DUO 0013。13 個目ということです。

中塚：こういう話も節目節目で、DUO 会議等で皆さんに伝えていたし、DUO 通信でもかなりマメにご紹介していたのですが、この面白さがどこまでみなさんに届いたのかはわかりません。

スポーツと芸術結べ

21美で協働探る座談会

スポーツとアートの協働を探ったテーブルトーク＝金沢市広坂で

スポーツとアートの協働が地域社会の活性化にどうつながるかを話し合うテーブルトークが十八日、金沢市広坂の金沢21世紀美術館で開かれた。

東京のサッカーリーグ「DUOリーグ」の活動事例などが報告され、約三十人の参加者は真剣な表情で聞き入っていた。

DUOリーグは東京都文京区などを舞台に高校運動部とクラブユースで構成されるサッカーリーグ。

会場に招かれた同リーグの中塚義実チェアマンは地域リーグを盛り上げるには、地元の支えが必要とした上で「（活動規模が）大きくなる」と、当初の理想が見えにくくなる」と警鐘を鳴らした。

その上で、中塚チェアマンは廃品シューズをリサイクルして自前のトロフィーを作った経験を紹介し、スポーツと芸術的な取り組みは両立するとの見方を示した。

トーク後は、同美術館に設置されている巨大サッカーボードゲーム「AC－21」で交流戦も企画された。（山田雄一郎）

副産物②ネットワーク・（例）金沢

中塚：もう一つの副産物はネットワークですね。金沢 21 世紀美術館でスポーツとアートのシンポジウムを開き、金沢の人たちとつながりました。このときの登壇者がいまもサロン 2002 にいます。

2009 年の夏は大阪で、「水都大阪」というアートイベントがありました。これは土谷さんの作品「巨大サッカーゲーム」ですね。佐藤いちろう君のスキンプロジェクトも出店し、一番上が SOLE SOUL、そしてサッカーボールでできたコインケースづくりなど、こういったものを作って楽しむワークショップがありました。私も、息子、娘と一緒に参加してサンダルを作りました。この日は橋本知事も来てましたね。

土谷：そうですね。政治的信条は全く関係ありませんけど主催者ですからね。

５．12 年が経過して
ー「部活先生」の“遊び心”は??

中塚：トロフィーはその後もずっと使ってきました。そして当初から、12 年使ったら次のトロフィーを作ろうと言っていました。このことは DUO リーグの中で共有されていたはずなのですが、最後の 12 年目がコロナのドタバタということもあり、あいまいになってしまったところがあったかもしれません。

一方で、スキンプロジェクトの続編として面白いワークショップを 2015 年前後にやっていました。これは試合の合間の写真です。サッカーボールからコインケースをつくる。向こう側では、フットサルがらみですが、体育館のラインテープの芯からペン立てを作る。こういうことに取り組んでくれる面白いおじさんもいるんです。この日はグラウンドでサッカー、体育館でフットサル、そして青空の下のブルーシートでワークショップ。こういうとこへ来て一緒に遊ぼう、ということをやっていました。けど残念ながら、こういうところに顔を出そうとする高

校生は少なく、それ以上に、そこに高校生を導こうとする指導者が少ないですね。「部活先生」はこういった遊びには無関心です。

先ほどの張さんの質問への回答にもなりますが、DUO リーグではある時点で、後期リーグは昇降格なしのワンデーイベント、「自主運営のサッカー大会」をすることになりました。右下の写真にあるぐらい多くのチームが集まり、半面サッカーをやっているところです。こうしたイベントを主催することで、高校生が大きく成長することを私は何度も見てきました。しかし「部活先生」はこういう遊びには力を注ごうとしません。残念です。

ここから先はおまけになります。DUO リーグのプログラムには以前、いろんな学校のマネージャーが連携して記事を書くこともやっていました。また、一つのクラブではやりにくい審判講習会やトレーニングの研修会も、リーグ単位でやっていました。自前でやるだけでなく、池袋にある東京リゾート＆スポーツ専門学校と連携し、リゾスポの学生主催のテーピング講習会も、ついこの間までやっていました。リゾスポの学生たちにとってもすごくよい勉強になっていたと思います。彼らは鹿島ディアーズというアメフトのチームなど、いろんなところで実習をするのですが、実習先の一つに DUO リーグの加盟クラブがありました。こういう連携を豊島区の専門学校としていました。いまも DUO リーグのスタッフ名簿にリゾスポの名前があるようですが、いまは連携をとっているのでしょうか。名前だけ入れていても仕方がないと思いますので、改めてご確認いただければと思います。

DUO リーグはいまどうなっているのか。2007～08 年度の「トロフィーがない！」プロジェクトで一時的に、あるいは一部のクラブ関係者は“遊び心”を取り戻したかもしれないけど、その後もあまり変わらず、ただ単に試合をこなすだけで時が流れていったように思います。

リーグ戦とカップ戦の違い

カップ戦	リーグ戦
ノックアウト方式 （負ければ終わり）	総当り方式 （負けても次がある）
短期間	長期間
シーズン中の単発イベント	シーズンそのものを形成
非日常的な行事	日常生活の一部
移動をともなう	生活圏で行なわれる
主催者が運営	当事者による自主運営

ユース年代にリーグ戦を！

1. リーグ(戦)は“組織”である

特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たち自身で自分たちの活動をささえる－自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

2. リーグ戦は“生活”である

平日のトレーニング週末のゲームで1週間の「サイクル」を形成し、リーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦を行う」ことではありません。リーグ期間をどこへ持っていくかは大きな課題です。地域ごとの事情もあるでしょう。

3. リーグ戦は“あそび”である

“あそぶ”の前につける形容詞は「自然に」「ちゃんと」「本気で」「徹底的に」がふさわしいでしょう。定期的に“あそぶ”仕組みがリーグ戦です。言われたから「総当たり戦を行う」のではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

リーグ戦とカップ戦を比較してみました。リーグ戦はシーズンそのものを形成します。日常生活の一部であり、生活圏で、当事者による自主運営で行われます。結果的にクラブが育ちます。リーグは組織です。リーグ戦は生活であり遊びです。極めて当たり前の、原点のところに立ち返って、DUO リーグが目指していたものを見つめ直し、これからやろうとしていることを、DUO リーグの皆さんと意見交換できればと思います。

最後におまけです。NPO サロン 2002 ではさまざまな事業に取り組んでいます。月例サロンでは今年度、「ユースリーグ」「スポーツとアート」をメインに据えていこうと考えます。来月はユースリーグ第二弾として「U-18 フットサルリーグを中心に」を取り上げます。

こちらが用意した中身は以上です。いまの内容に関してご質問や、あるいは補足などもいただければと思います。いかがでしょうか。

＜ディスカッション②＞

小松：はじめまして。筑波大学附属高校で美術を担当している小松と申します。中塚先生からお二人のことは伺っておりまして、今日の話を楽しみにしておりました。

中塚：今年度からサロン 2002 ファミリーに入会ですよね。

小松：はい、よろしくお願いします。お話、すごく面白く聞かせていただいたんですが、トロフィーについてはいろんなものを作ることが考えられると思うんですけど、大きい靴にしようという発想は、お二人の中で最初から決まっていたのでしょうか。

土谷：日本国内にサッカーのスパイクが持ち込まれた当時の形を調べて、黎明期のサッカーシューズを形にしようとしました。大きさは、何でだったかな。

佐藤：なくさないようにしたくて大きいものにしました。かつ持ち運びもできるぐらいの、まあぎりぎりのラインでということですね。

土谷：宅急便で送れるサイズということでしたね。それと、集まったアッパーの数から割り出したのかな？

佐藤：いや、割り出しまではしていません。たぶんそれはできなかった…。

土谷：でも覚えてない…。

佐藤：「送れるぐらいの大きさ」ということは言ってましたね。宅急便で送れないとだめだから。大きさはそうなりました。これが（Zoom 画面に提示）そのレプリカです。だからこれもトロフィーです。優勝したところが持ち回りますが、それと交換にこのレプリカをお渡しします。ただ DUO リーグは 1 部、2 部、3 部とあるので、3 部用にも一応作っています。これ実は子ども靴でして、本当に子どもが履けるようにできています。それをレプリカにしちゃってます。

小松：おしゃれですね。

佐藤：これが MVP 受賞者用で、ちゃんと名前が付いてます。得点王と MVP と、優秀審判賞の高校生にもあげてますね。

中塚：いまは優秀審判には審判服をあげていますよね。

佐藤：記念品としてこれも渡しています。部活のバッグに引っかけられるように。キーホルダーになっています。トロフィーをモチーフにしているつもりです。これも実はスパイクです。ずっと DUO リーグのスパイクを持っていて、実は解体したときのものをちょこちょこ切って使っています。その当時のものですね、たぶん。だから素材はトロフィーを作ったとき時と同ですね。

小松：ありがとうございます。大変興味深く聞かせていただきました。

土谷：加えて言うと、金沢でも靴磨き講座をやりまして、靴を集めました。大阪でもかなりの高校やクラブユースで靴磨き講座をして、皮を集めて、大阪は大阪でリサイクルしました。DUO リーグのものではなく、大阪は大阪でやりました。

中塚：いちろうさんがレプリカを示してくれたけど、あれを作るのも時間がかかるし大変そうですね。急に連絡が来てもすぐには作れないですよね。

佐藤：今回実は 2 月の終わりに連絡が来たんですけど、本当は 3 月に高校生が卒業する前に渡したかったんです。それが間に合わなくて、いま僕の手元にあります。だから、岸君の方に連絡させていただいたんですけど、DUO リーグの加盟校に送らせていただくので、選手を表彰してあげてください。卒業してたらごめんなさいということで。すみません、ちょっと遅くなって。

中塚：ということで、こちらからの前半戦、DUO リーグの理念とあゆみについてと、「トロフィーがない！プロジェクト」の概要について紹介させていただきました。
　どれぐらい、こちらが言いたいことが伝わったのかよくわからないけど、リーグ戦というのは、ただ単に総当たり戦をやってチャンピオンを決めて、昇降格を競い合ってというものではないのだということです。そもそも“遊び”なんだよということです。原点のところを大事にしようということです。そして、いろんな人にささえられている。いろんな人とコミュニケーションを取りながらやっていくと、ますます面白くなっていくということです。このあたりを話させていただきました。
　では後半戦です。このあたりから嶋野さんにバトンタッチして、残り 9 時半ぐらいまで、進めていきましょう、お願いします。

Ⅲ．DUO リーグのこれから

嶋野：ありがとうございます。今回はじめて私もこのサロンに参加させていただきました。そもそもなぜこの話を中塚先生にしていただいたかは、あとで話します。
　まず、参加された DUO クラブの皆さんから、本日の印象や感想を伺っていきたいと思います。どういう順番でいきましょうか。DUO クラブの方が 16 名います。私より年上の先生方から話を伺っていきたいと思いいます。豊島学院の早川先生、いかがでしょうか。

早川：豊島学院高校の早川と申します。嶋野先生からお話があったように、DUO リーグはかなり長くから参加させてもらっています。中塚先生からもご報告がありましたが、当時イベントの一つで DUO 選抜がありまして、たまたま私が高体連の選抜の方に関わった時期があったので DUO 選抜にも関わらせていただきました。選手を集めるのは非常に難しかったのですが、盛んにやっていた時はリーグのグループ毎にチームを構成して試合をやり、優勝したグループ、もしくはここで DUO リーグ選抜を選び出し、三菱養和さん試合をするようなイベントを何度かやることができました。ただ、やはり会場問題や選手の派遣の問題で、なかなか思うように進められなかった印象があります。
　本校も部員数がかなり多いので、たくさんの生徒が DUO リーグに関わりながら勉強できるところが非常に頼もしい存在のリーグ戦だと思います。

DUO リーグ選抜に関わらせていただいたことで私自身、選手だけでなく指導者としても成長させてもらえる場あったなと思います。

嶋野：ありがとうございます。多くの先生方が今までリーグを運営してくる中で関わってこられました。ただゲームをするだけでなく、いろんなところで。そういう話もいろんな先生から伺っていきたいと思います。

僕より年上の人を探してるのですが…。では私のほうの問題意識を、ここに来られている方々と共有したいので話を少しさせていただきます。私は中塚先生のように、スライドの準備もしてませんが、チェアマンをやることになったところから話をさせていただきます。

中塚先生はチェアマンを何年務められましたか。

中塚：1996 年から 19 年間ですね。

嶋野：そうですよね。その後、本郷高校の岩野先生が 7 年間。岩野先生自身も 4 年で辞めるつもりだったけれども、コロナをはじめいろいろ重なって 7 年に及び、私に回ってきまし。実は 2 年以上前から私のところに話はきていて、次は自分に来るんだということは思っていました。ただ、実際に中塚先生がされていたこと、DUO リーグがこれまで積み重ねてきたことを、本当に自分もできるのかとか、あるいはどうやって自分自身がチェアマンとしてやっていくべきなのかとか、いろいろ考えてた 2 年間でもありました。一番大きかったのは、コロナもあって自分自身の仕事の仕方や方あり方、これからどのように自分自身の人生を送っていくのかを考えたことです。DUO リーグのチェアマンをやるんだったら、自分はどのようにリーグを考えていく必要があるんだろうと考えました。

中塚先生にも前にお話させていただいたんですが、三つに分けて考えています。いままでと、いまと、これからいう三つです。「いままで」というのは、中塚先生が最初に話された、リーグを立ち上げ、裾野が広がり、サッカーの部分では東京都に広がり、そしてサッカーだけでなくいろんなスポーツにリーグ戦文化が広がっていったこと。そうなってきたのがいままでのところです。「いま」というのは、働き方改革があったり、「部活先生」という中塚先生の言葉もありましたが、どこかで仕事になってしまい、仕事になってるから当然忙しさが生まれている。それがいまなのかなと思います。そして、リーグ自体も上まで一本につながったことで地域のリーグのあり方が問われている。

では「これから」のリーグはどうやっていくべきなのか。いままで、いま、を経て、これから。

先ほど中塚先生の話にもありましたが、日程を消化して昇降格を争う。それだけでいいのかという問題提起もそうですし、遊びがないというところもすごく大切なことだと思います。一方で、競技の部分においても問題があるかなと個人的に思っています。先ほど佐藤さんの話にもありましたが、サッカーやりたい人がやれないところだったり、やれる環境がなかったところから、だんだん規模が大きくなって誰でもサッカーがある程度できるようになってきた。さらに、所属クラブが多くなったことで一つの会場に複数チームが集まってコミュニケーションをとる機会も失われてしまった。そうなってくると、リーグ戦に来た子たちも、ゲームをやって終わって帰って、それで終わってしまう。ゲームのテクニカルな部分やレフリング、そして運営面に至るまで、いろいろなことに意味を見出す子たちや、そこで真剣勝負を本当にしている子たちはどれぐらいいるのかなというところも考えています。リーグ戦そのものをどう運営していくかということもありますが、やってる人たち同士、その試合、そのリーグ、そのゲームにどれぐらい重きを置く、意味を持たせるのかということも大事になってくる。2 地区のリーグから上のリーグに上がっていくクラブが、他の地域に負けない、強く、そして逞しい組織であってほしい。そのための仕掛けを、我々がどのように考えていくのかということです。

あとは本当に単純なところで言うと、事業の仕分けですね。競技の部分と競技じゃない部分とか、あるいはその両方をやっていかないと、やっぱり持続可能にはならないのかなとも思っています。そういった意味では、トロフィーの話もすごく重要です。12 年で一回そのトロフィーを変える、終わりにするという話もありましたが、トロフィーをなくしてもいいんじゃないかという議論も、実際 DUO リーグの理事会の中でありました。ただ最終的には DUO リーグのトロフィーはあるべきだと、DUO 会議で決着しました。トロフィーをもう一度作る決定はされていて、この場にも参加してたいただいている岸さん、それから杉本先生に、DUO リーグのトロフィーを作るところに軸足を置いて話を進めてもらいます。そんなところも含めながら、これから佐藤さんや土谷さんとも話をしながら進めていきたいと思ってます。お願いします。

杉本先生、いま考えていることを話せますか。トロフィーのことについて。

杉本：振っていただいてありがとうございます。実際にトロフィーをどうするかというところで、最初から話に参加しないといけなかったんですけど、ごめんなさい、遅れてしまいまして。

私自身、貞静学園で生徒が少ない中、試合を組んでもらえるところが本当はないはずなんですけど、合同チームで生徒たちが試合ができる場があることは本当に幸せだと感じています。すごく DUO リーグには感謝しています。

途中から聞いた部分もあり、中塚先生のお話を全部は伺えなかったんですけど、トロフィーのでき上がる経緯を聞いて、せっかく振っていただいたんですけど、自分はすごく浅はかだったなという考えがあります。自分も関西人なので、遊び心は持っているというか、どうせやるなら面白くという気持ちもすごく持っています。自分の中では、遊び心がサッカーやる上ですごく大事だと思っています。どんなトロフィーにしたらいいかと考えたときに、見て面白いものがいいかなと。そこで、ロゴになってる歯磨き感覚。歯ブラシをモチーフにしたトロフィーはどうかなあと思っていました。磨くというところは、歯磨き感覚という部分と、技術も磨いたり、スパイクを磨くもあります。そういった、ただのトロフィーじゃなくて、歯磨き感覚という、歯ブラシを使って何かできないかなとは思ってました。歯ブラシの歯の部分を人工芝にしたり、なんかこうつけたり。得点王に渡す副賞は、スパイクを磨けるような歯ブラシ的なものにしたり。なんかそんな、もらってインパクトがあるようなものだったら面白いなあと思っていました。

先ほど、でき上がった経緯をお聞きして、本当にいろんなことの集合体がトロフィーに詰まってるのをお聞きして、私が考えていたことだけだとどうなのかなって思いました。あくまでも一つの案として聞いてください。またそこに何か加えて、これもどうだ、あれもどうだという案が出て、トロフィーそのものの案じゃなくていいんですけど、なんかそういったものが最終的にできればいいかなと思っています。競技運営部の中で考えていくことになってますが。DUO リーグということは、ここにいらっしゃる先生方もみなリーグ関係者なので、ぜひ案を出していただき、みんなでいいトロフィーを作っていけたらと思っています。ちょっとまとまりがありませんが、そんなことを考えています。

嶋野：ありがとうございます。中塚先生のスライドにもありましたが、飲み会減というのがあり、ホントだったら顔つき合わせて、鍋つつきながらという話もありましたが、いろんな話をしながら、そういうことを考えてるんだというようなことがあればいいんですけど、この 2 年間、そういうのが全部ストップしています。あるいはそういう、話す場所に行くような習慣も、この 2 年でどこか奪われちゃったような感じもしています。じゃあ今度いくかってなったときに、やっぱり皆さん家庭があって、生活、仕事、いろんなところで制約があったりというところがあるのかなと思います。たださっきの話で思いましがた、今まではマンパワーというか、みんなでやろうじゃないかというようなエネルギーが突き動かしてたところがあるんじゃないでしょうか。当然それだけじゃ話は前に進まないの

で、どれだけの人に賛同してもらえるか。規模がこれだけ大きくなり、1 部から 3 部まであり、たくさんのクラブがあるとたくさんの大人がいて、いろんな人のいろんな考え方があってというところがあります。ただチェアマンになって思うのは、本当に 2 地区の DUO リーグが、ほかのリーグよりも優れているところを見せられるようなリーグになっていくのが良いのかなって思っていて。それは競技の部分でもそうだし、運営のところでもそうだし。ただそれで終わりっていうだけじゃないものをどうやって作っていけるかというところ。それはもしかしたら、私自身の反省として、試合を消化することが目的になってしまっていたところだったり、あるいはユース審判の育成ということにもっと力を入れなきゃいけなかったのに、自分が全部笛吹いちゃったりというのもありました。だからやはり、2 地区から上がっていくチーム、クラブが、例えば地区トップ、あるいはその上にどんどん上がっていくことがなく、戻ってきてしまうことがあると、地区のリーグとして、どれだけいいクラブ（組織として）を上に上げられているのかなっていうようなところも考えていかなければいけないといま思っています。

そのために、私一人が何かを考えても話は先に進まないので。それこそいままでやいまというところでは中塚先生の話、今回もそうですけれども、一番大事なのは、多くの DUO クラブの代表の方々にこの話を聞いていただくことで、「いままで」と「いま」をまずは知っていただくこと。そしてこれから先については、いま参加されている DUO リーグの方々も含め、みんなで考えていかないといけない。誰かが先導して、それに対してみんなが付いていく、付いて行かないかっていうことじゃなくて、じゃあどうしたらもっとこのリーグが良くなるかを話し合って進めていけたらなと思います。

もしこのまま感染状況が改善に向かうのであれば、飲みながら話ができるようなところをもっと作っていきたいなと思いますし、そういうところが嫌でなければ、皆さん参加していただきたいなと思います。私自身は比較的フットワークが軽い方なので、いろんなところに顔出させていただきたい。

やっぱり「これから」についての問題意識。あとはリーグをもっとよくしていく。その「よく」の定義は、中塚先生の遊びの定義にも通じるところがあるかなと思いますが、何を遊びと捉えるかは、なんかすごく難しい。人によって解釈の仕方が違ったりすると思いますが、そういったものを皆さんに伝えられるようなことをしていきたい。2 月ぐらいからチェアマンの仕事をやり始めたんですが、4 年か 5 年のところで形として作り上げていきたいなと思っています。

今回参加してくださっている DUO クラブの方々もそうですし、今日私の話を聞いていただいた皆さんに対してもそうなんですけれども、そんな感じでいま考えてますっていうようなところのお話をさせていただきました。

逆に中塚先生、いま話しを聞いておられて、こんなのどうなのとかがあればお願いします。

中塚：僕がいつも思っているのは、皆さんの本心が聞きたいということです。今日も皆さんから、感想とか意見、苦言も含めて、もう少し出てきたらいいのにと思っています。こちらとしては、定年のいまだからこそ、いろんなことを振り返り、私および私の周辺の面白い人たちでやってきたことを整理して、改めて DUO リーグのことを紹介する機会となっています。みんな目の前にあることに「がっ」と取り組んできたわけです。それを、面白がりながら解決してきた。それだけです。はっきり言って、周りの人が何を考えているのか、本気で付いてきてくれているのかまで、きめ細かくは見てません。人の話ばかり聞いていたら前へ進めないかもしれない。だからこっちは自分の信じる道をグイグイ行ってただけなんです。では「皆さんはどうでしたか？」ということを、本当はいろいろ聞きたいですね。こちらからは情報は出しまくってきたわけです。通信やら何やら、自分のできるあらゆる方法で。だけど本当にメッセージはちゃんと届いていたのでしょうか。書きものとしては届いたかもしれないけど、魂がちゃんと届いていたのでしょうか。もっと言うと、こちらから発信するメッセー

ジは、約 1,000 人いる DUO リーガーに対するものでもあるわけです。それが顧問のところで止まってはいないかということが、一番恐ろしい。きちんと伝えてくれていましたか、ということです。

今日のこの会についての嶋野さんと前チェアマンのやりとりの中で、「強制参加」という、えらい強い言葉が出ていました。ちょっと違うんですよね。共有すべき大事なことだから伝えるし、たぶんおもしろいから案内するわけです。「強制」とか「義務」という話になるとぎすぎすしておもしろくない。ぎすぎすした関係だと、大事な情報が指導者のところでストップして部員には正確に届かない、変換された形でしか伝わらないことがあったのではないかという気がしています。

嶋野：ありがとうございます。中塚先生の中ではたぶんリーグとしてというより組織としてというところでは、そういう問題意識はあるのかなと思います。そこについて、私も先日インターハイの支部予選の抽選会でいろんな先生と話をし、玉生先生とも電車で一緒に帰る道すがら、いろんな話をさせて頂いたので、また皆さんにもどこかの場所で提示できればと思っています。私自身のチェアマンとしての基本的な問題意識、あるいはこれからやっていかなければいけないことについては変わらず、いまお話ししたような「いままで」と「いま」を踏まえて「これから」をどういうふうに作っていくのか、というところです。本当にこれからリーグ戦にもっと重きを置いてくれというような、2 種委員会からの話が来ています。その中で、では地区のリーグ戦をどうやって大事にしていくのか、リーグに所属する皆さんに考えてもらうにはどうしたらよいか。リーグ戦とカップ戦のカレンダーをどうするかも、たぶんあると思います。オフをどこにするのかなど。みんながワクワクするようなゲームが多くなるリーグにできるのかというところが最終的なゴールなのかなって思っています。そんなところについても、私自身も初めて、「あっ、こういうことがあったんだ」ということがわかった話も今日はあったので、それをまたこれからにつなげて、できれば文字にして、あんな通信できるかどうかわかりませんが、比較的文字にするのは得意なので、やっていきたいなと思います。

これを機会に何名かの方にご発言いただきたいと思います。足立新田の田中先生、取れますか。

田中：はい、田中です。

嶋野：若い先生として話を聞いて、どんなことを感じられたかをお話いただいてもいいですか。

田中：貴重なお話を本当にありがとうございました。率直に、本当に自分が何も知らなかったんだなというのが感想です。小俣先生にリーグのことはいろいろ聞いてはいましたけど、もっともっと深く、もっともっと色んな人が関わっていて、おそらく相当難しい道のりがあったのだということをいろいろ考えると、当事者意識ってよく話されていますが、これを持たなきゃと思っていたものが本当にぶつかったなと。もっともっとこのリーグを大切に、自分もするし、皆さんも。みんなで考えていかなきゃいけない問題なんだなと、今回本当に思えました。力になれるかどうかわかりませんが、積極的にお力になれるようにしていきたいと思いました。すみません、まとまらず。以上です。

嶋野：はい、これ説教じゃないですからね。

田中：はい、ありがとうございます。

嶋野：私も周りにいつのまにか自分の年下しかいなくなってきて。いままではお酒作る立場だったのに、なんかそうじゃなくなったのを最近感じ始めています。なんかいま僕やってますけど、正直、もっと早く若い人に振っといたほうがいいんじゃないかなというのは思ったりします。

もう一人、若い人の話を聞こうと思います。倉口先生。もう振られると思ってましたね。

倉口：はい、向丘高校の倉口です。最初のところでリーグ戦がどのようにできたかというところにすごく興味を持ちました。ああ、そういうふうにできてきたんだなというのは、いろんなことを思い出しながら聞かせていただきました。僕自身、ちょうど 2011 年が高校入学で、その時の高校で T リーグと地区リーグに所属していて、それになんとなく参加してたんですけど、こういうふうにいろんな人の苦労があってやってたんだなあというのをすごい感じました。いま自分に何ができているのかを改めて考えさせられるよい機会になりました。

あとこれは個人的な話ですが、いまちょっと部活で、あり方というか、どういうふうにチームを作っていくかで、すごい悩んでいる部分があります。やっぱり勝たせて、うまくなって、良い経験ができてっていうことはすごく大切だなと思います。僕自身もそれでいろいろ考えながら、高校時代もやっていましたが、DUO リーグの歯磨き感覚とか、本気で遊ぶ楽しさというところをいま一度チームにも浸透させなきゃというのを、いろんな話を伺って感じました。サッカーの試合で勝つだけじゃなくて、サッカーを通してっていうところで、いろんなことを経験させてあげられる場を、いろんなところで作れたらというのを感じました。話を聞けてよかったです。すいません、ちょっとまとまっていませんが、ありがとうございます。

嶋野：すみません、無茶振りを快く引き受けていただいて、ありがとうございました。たぶんこれから若い人たちにもどんどん振りながら、私自身が結構抜け抜けなんで、皆さんにいろいろ助けてもらいながら。この間も加盟表の提出を僕が忘れていたところ、石原先生がちゃんとサポートしてくれて、出さなきゃダメですよっていうのを教えてくれたました。私自身もものすごく抜けてるし、そういったところを若い先生方とかいろんな先生方に助けてもらいながらやっていくところで、DUO リーグ 2022 年度からは進めていきたいなと思います。当然、いままでとかいまの部分で苦労だったり大変だったところはあって、それはもう変わらない事実だと思います。いろんなことがあったのは私自身も知ってますが、ではこれからどうするかとについては、本当に皆さんが少しずつ、何か考えたり何か出していくことによって解決したり進んでいくことが大事なのかなと思います。

いまの倉口先生は石神井高校の出身で、だから何だってことじゃないですけど、そういういろんな人たちの話も聞きながら、進めていきたいと思っています。

今日来られている先生方で、こういうことを聞いてみたいとか、あるいはご意見だったりとかがあれば是非伺いたいんですけどもいかがでしょうか。

嶋崎：サロン 2002 で理事をさせて頂いております嶋崎と申します。いま、安藤さんからチャットに質問が入っています。「どんなトロフィーにするかというディスカッションに、高校生も入っているでしょうか。チームごとに、アイデアを出し合ってプレゼンして、もっとも人気が高いものに決めるのも面白いと思いました」という提案です。私は大学で、いま体育・スポーツ経営学を専攻し、運動部活動の研究をしています。部活動の意味は、自治を学ぶ場ではないかと考えています。そういう意味では生徒たちがもっと意見を出し合えるような空間が必要ではないかと思います。

いま嶋野先生が非常に一生懸命やられているし、周りの先生方も一生懸命やられているのは強く感じられるんですけど、ではそこに高校生たちはどれぐらい関わっているのかなというのがお聞きしたいことです。できればもっと関わっていけばよいのではないかというのが私の意見です。いかがでしょうか。

嶋野：即、採用させていただきます。ありがとうございます。たぶん関わる人たちが増えていく。例えば校則をどうするか、制服をどうするかというような話。いまちょうど私の学校でもやっていますが、そういうところに、例えば生徒会長、校長、それから PTA 会長、あるいは自治会長、そういう人たちに入ってもらっていろんな人を巻き込んでというところ必要だと思っています。嶋崎さんがおっしゃったところは全部、杉本先生も聞いていますので、そのあたりは入れてやっていきたいと思います。ありがとうございます、貴重なご意見。

嶋崎：もう一点、よろしいでしょうか。クラブのリーグの運営とかレフェリーですね。このあたりも高校生が担っていけるようになるといいのかなと思います。私自身、プレーヤーとしてはまったく駄目でしたけど、大学で主務をやり、高校の教員になってからレフェリーをやってということで、そういう意味で非常にラグビー、私はラグビーなんですが、ラグビーを楽しむことができました。いろんな楽しみ方があると思うので、是非、高校生のうち、そういう若い年代から、多様な楽しみ方ができるような場が必要だと思います。いまの高体連のノックアウトのトーナメントではなかなかそういう経験をさせてあげることができないと思います。リーグ戦はそういう経験ができる貴重な場ではないかと思うので、是非こちらの方もそうしていただければと思います。以上です。

嶋野：ありがとうございます。やっていきたいと思います。その他 DUO リーグのこれからについて、こういうのはどうかというのがあればお願いしたいんですがいかがでしょう。早川先生、どうぞ。

早川：先ほどちょっとお話させてもらいましたが、中塚先生の話と嶋野先生の話を聞いて、リーグ戦を成立させていくというか、すごくチームが増えたのでしょうがないんですけど、試合会場がすごく転々としたんです。バラけてしまっている。本校はグラウンドがないので、グラウンドのあるところにお邪魔するところがあり、昔は中塚先生の力を大きく借りて、筑波会場にチームが集まってたんです。筑波会場で 5 試合とか。一日中そこで、中塚先生の時間も使っていただきながらですが、一つの会場で 5 試合やるから 10 チームが集まる。そこで指導者の交流もあったと思うし、いろんな会話が、グラウンド上で Face to Face でやれたのがすごく大きかったと思います。ここのところチーム数が増えてリーグ戦の会場がばらけてしまい、自分のチームで出てない子の練習試合を含めるとサッカー場でも本当に 2 チームずつしか集まらない。ばらけてしまっている。そこでコミュニティがなくなったのかなと思います。DUO にとってみれば筑波グラウンドは聖地的なところがあり、そこに集まれば指導者も部員もいるところがありましたが、いまはそれがなく、コミュニティがなくなったのをすごく感じています。それをするためにはどこかの会場で一日押さえなきゃいけない。そうすると、該当する学校の指導者が負担になる。中塚先生の力も借りながら、筑波の会場だけ借りて運営は別の学校がするようなやり方もありましたが、いまの時代はコロナもあるので、他のチームにグラウンドを貸すことは難しいんでしょう。けどやはりどこかで会場を一日確保して、そこにたくさんのチームが集まると、もう少しいろんな動きが出てくるのかなという感じはしています。なかなか難しい問題だと思いますけど。これからにおいてはそのあたりがすごく細分化されているので、リーグ戦としては成立していくかもしれませんけど、コミュニティがなくなっていくのも DUO にとって損失かと感じます。

嶋野：ありがとうございます。うちも実際グラウンドがなく、よそにお邪魔するしかありません。それこそ電話をかけまくるしかなかったので、本当にそのとおりなんですよね。大きなことを考えないといけないですね。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。時間もありますが。

　もっと多くの先生方にお集まりいただきたかったところが正直ありますが、チェアマンをやり始めるにあたり、どこまでで皆さんに伝え切れているのかというところが正直あります。これから始めて

いく中で、いろんな失敗だったり、うまくいかなかったりするところは多々あると思いますが、いままでのところをちゃんと踏まえながら、これからにうまくつなげていくよう進めてまいります。まだまだ頼りない部分とかもあります。先ほどから先生方やいろんな方々からご意見を頂きましたが、そういったものを吸収しながら前進していきたいと思います。今後ともご指導というか、いろいろご意見いただきたいのでよろしくお願いいたします。

では、私の、と言うか DUO リーグ側についてはこれで終わりにします。ありがとうございます。

おわりに

中塚：どうもありがとうございます。もっともっと、いろんな人からご意見や感想をいただきたいところですが、時間も限られてます。若手の人が言ってくれたことをお聞きすると、話せばわかる、というかこちらが伝えようと思えば、あるいは伝える機会を設ければ、ちゃんと伝わるんだというのを改めて感じました。ぜひそういう機会を DUO リーグの中でも作ってくれたらいいし、公開サロンの場をどんどん活用してもらって構わないと思います。一緒にやって行きましょう。

要望が一つあります。やはり「伝え続ける」ことがものすごく大事だと思います。私がチェアマンのころは、「DUO リーグのあゆみ」という簡単な文書ですが、年度ごとに試合結果だけでなくまとめて HP にも載せていました。年度ごとのスローガンや、前期と後期の加盟クラブと参加チーム、前期にこんなことがあって後期には…という感じで覚書みたいなものを作っていましたが、どこかで途切れている気がします。それをぜひ続けて、DUO リーグの HP に載せてもらい、外部へ発信しながら内部で共有することを絶やさないようにしてもらいたいのが要望です。

それから、これもおそらくここへ来てくれた人はおわかりだろうと思うけど、いろんな分野の人と関わるとめちゃくちゃ面白いんです。そしておそらく化学反応が起きていくと思います。学校の先生はどうしても忙しがる傾向が強いけど、ときにはこのような場で、他の分野の方との交流を楽しむことをお勧めします。いまはオンラインで地域を越えてつながることができます。コロナをネガティブにとらえずに、いろんなつながりを、逆にこの機会に作ってしまうようにすればいいと思います。そうすればトロフィーも含め、いろんなアイデアがいっぱい出てくるんじゃないかなと思います。楽しみにしております。

私も DUO リーグを側面から見守り、時には苦言も呈しつつ、だけど嶋野チェアマンを全面的に応援していきたいと思います。DUO リーグ、がんばってやっていきましょう。

最後に土谷さん、佐藤さんからコメントをお願いします。

土谷：今日はありがとうございました。ちょうど富山県の橘先生もいらっしゃいましたが、3 月に富山県教育委員会に呼ばれて、デザインやアートの分野に進みたい、県の様々な学生 30 人ぐらいに講演をする機会があり、そこで DUO リーグのトロフィーの話をしました。いくつかのレパートリーを並べてどれがいいかを尋ねたら、高校生とアートのコラボを聞いてみたいと言うので、その場で DUO の話をしてみたんですけど、戻ってきたアンケートのウケが非常によかったんです。デザインとか美術を志したいけど、いまはサッカー部にいるっていう子もいると思います。ここからはまた東京の話になりますが、先ほどの安藤先生の書き込みを受けて思ったことは、サッカー部だけでなく、関連している高校の美術とかデザインに興味ある学生に向けてコンペをしてみるのもいいなと思いました。

そういったアウトリーチというか、外側に話すときに、これまで DUO リーグで大切にしていたことや培ってきたことをわかりやすく編集する作業が入ってくる。それも重要なデザイン、言葉のデザイ

ンだと思うんですけど、そういったときに DUO リーグの組織の考えも、まとまって外に発信しやすくなってくるのかなと思いました。
　ということで、サッカー関係者だけじゃなくて、関連する高校の結構総合的にさまざまな・・・。

中塚：土谷さんの声が聞こえづらくなりました。高知県との間で通信トラブルが発生した模様です。たぶん良い話だったんだろうと思いますが…。先に佐藤いちろうさんから一言お願いします。

佐藤：今日はありがとうございました。土谷さんとの話とつながるんですけど、サッカーボールで作るコインケースとか、中塚さんと話してて、普段、スポーツをやらない子が、例えば文化祭でこれを作り、作ったものを売ったり、そういう遊びに変えたり、その技術に関わったり、作る子たちと関わりながらそれぞれを進化させたりするところまであると面白いよねという構想は、実はありました。だから広がりは、スポーツだけに限らない方が面白いと思います。実際に僕もスポーツとの関わり方とモノ作りとしての関わり方って、この DUO リーグのトロフィーを通じて出会ったというのがあるので。僕らが関わったこの歴史を、面白くつなげてほしいというのが、関わってみて思ったことです。実際僕らがまた関わるとしても、それはいままでの歴史からつながったことで、面白いことはやってほしいなあと。なんかハードルが高くなっちゃうかもしれませんが、そう思いました。ただ単純に、前回は中塚さんがアーティストに声をかけたけど、今度は違うことの方が面白いなと思います。

中塚：ありがとうございます。土谷さん、なんか途中で声が切れちゃったけど…。

土谷：はい、落ちましたけど、気を取り戻しました。

中塚：それでは、9 時半を過ぎましたけど、全体ではこれにて終了。次回の公開サロンは、冒頭申しましたが 5 月 10 日、引き続きユースリーグ、今度は U18 フットサルリーグを取り上げます。今日も何人か来られていますが、もちろん DUO リーグ関係者も、続きの話でもありますので、来てもらえればと思います。どうもありがとうございました。
　このあと残れる方は、5 分後に乾杯しましょう。

（続きはオンライン懇親会）